

平成 28 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

ケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件

学籍番号 4115048  
氏名 杉山 走  
論文指導教員 小笠原悦子

合格年月日 平成 29 年 2 月 20 日

論文審査員 主査 工藤 康弘

副査 角野 悦子

副査 小笠原悦子

## 目次

第1章 緒言 .....	1
第1節 研究の背景 .....	1
第2節 研究の必要性 .....	2
第3節 研究の目的 .....	2
第4節 用語の定義 .....	2
第1項 成功 .....	2
第2項 駅伝 .....	2
第3項 日本チーム .....	3
第4項 コーディネーター .....	3
第2章 先行研究 .....	4
第1節 ケニア共和国 .....	4
第1項 基本情報 .....	4
第2項 スポーツ .....	4
第2節 ケニア陸上競技 .....	4
第1項 国際大会 .....	4
第2項 マラソン .....	4
第3項 クロスカントリー .....	7
第4項 ケニアのオリンピック大会での実績 .....	7
第3節 ケニア人ランナーのトレーニング拠点の海外への移動 .....	7
第1項 アメリカへのトレーニング拠点の移動 .....	7
第2項 日本へのトレーニング拠点の移動 .....	8
第4節 海外エージェントからの高い評価 .....	8
第5節 ケニアと日本の競技記録を世界記録とオリンピック大会記録と比較 .....	8
第6節 ケニア人ランナーの速さの秘密 .....	9
第1項 ケニア人の DNA .....	9
第2項 ケニア人の生理学的なパフォーマンス .....	9
第3項 ケニア人の育った環境 .....	10
第7節 ケニアの民族と部族の特徴 .....	10
第1項 ケニアにおける民族と部族 .....	10
第2項 Kikuyu 族の特徴 .....	10
第3項 Kalenjin 族の特徴 .....	11

第8節	Kalenjin 族と陸上競技における能力	11
第9節	日本チームとケニア人ランナーの関係	13
第1項	ケニア人ランナーが日本チームに勧誘された理由	13
第2項	ケニア人が来日できた理由	13
第10節	コーディネーターK	14
第1項	コーディネーターKのケニアにおける活動	14
第2項	日本で活躍し、成功したケニア人ランナー	15
第11節	ケニア人による異文化での適応	15
第3章	研究方法	17
第1節	調査方法	17
第1項	調査対象者	17
第2項	研究の調査期間	17
第3項	インタビュー調査	17
第4項	インタビュー内容	17
第5項	倫理的配慮	19
第2節	データ分析方法	20
第3節	分析の質の確保	21
第4章	結果と考察	22
第1節	結果	22
第1項	コーディネーターKとケニア人ランナーと日本チームの関係	22
第2項	コーディネーターKと日本チームとケニア人ランナーの3者が求める要素	23
第2節	ケニア人ランナーが最終的に成功するためのプロセス	34
第3節	成功したケニア人ランナーの共通点	35
第4節	コーディネーターKの役割	35
第5節	ケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件	36
第6節	2008年以降のオリンピック大会マラソン競技で成功しているランナーの特性	37
第7節	2008年以降における日本で活躍しているケニア人ランナーの特性	38
第5章	結論	40
第1節	本研究における結論	40
第2節	研究の限界	40

第1項 ケニア人ランナー.....	40
第2項 日本チームの監督.....	40
第3節 今後の研究課題.....	41
引用・参考文献.....	42
Abstract.....	48
謝辞.....	49

## 図・表リスト

図 1. マラソン男子競技記録歴代 TOP50(1924 年～2016 年) .....	6
図 2. マラソン男子競技記録 2016 年 TOP50 .....	6
図 3. 1964 年～1996 年オリンピックでのメダル獲得率(800m～10,000m) .....	12
図 4. コーディネーターKが日本チームに紹介した部族の割合 .....	14
図 5. コーディネーターK、ケニア人ランナー、日本チームの関係 .....	22
図 6. コーディネーターKがケニア人ランナーに求める要素 .....	26
図 7. 日本チームがケニア人ランナーに求める要素 .....	29
図 8. ケニア人ランナーが日本で活躍するために必要な要素 .....	34
図 9. ケニア人ランナーが日本で活躍し、成功するプロセス .....	35
図 10. 2016 年ニューイヤー駅伝に出場した外国人選手 .....	39
表 1. World Marathon Majors において、ケニア人ランナーの勝率 .....	5
表 2. ケニア記録、日本記録、世界記録、オリンピック記録の比較 .....	8
表 3. ケニアにおける民族と部族の割合 .....	10
表 4. コーディネーターKが日本チームに紹介して成功した選手一覧 .....	15
表 5. コーディネーターへの質問項目 .....	18
表 6. ケニア人ランナーへの質問項目 .....	18
表 7. 日本チーム監督への質問項目 .....	19
表 8. コーディネーターKがケニア人ランナーに求める要素 .....	25
表 9. 日本チームがケニア人ランナーに求める要素 .....	28
表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素① .....	31
表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素② .....	32
表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素③ .....	33
表 11. 2012 年と 2016 年オリンピック大会男子マラソンメダリスト .....	38

## 第1章 緒言

### 第1節 研究の背景

2016年現在、日本の国内のスポーツにおいても外国人選手の活躍が目立つような国際化が進んでいる。

2015年のラグビーワールドカップでは、日本が南アフリカに34対32で勝利し、日本はもちろん、世界中を驚かせた試合となった<sup>52)</sup>。その試合に登録されていた日本チームの31人中、外国出身選手が3分の1(10人)を占めていた<sup>47)</sup>。日本のラグビートップリーグが2003年に開幕をし、外国人枠を設けて以来、多くの外国人選手がトップリーグで活躍をしている。

相撲の世界では1964年にハワイから来た高見山関が外国人力士として20年間、現役力士として相撲を取っていた。2016年現在では、横綱3人が、全員モンゴル出身の選手であるなど、外国人の活躍が目覚ましいスポーツとなっている<sup>40)</sup>。

サッカーのJリーグでは、1993年の開幕の際初めて行われたヴェルディ川崎と横浜マリノスの試合でピッチに立った合計22人の選手の中、6人は外国人選手であった。<sup>42)</sup>2016年現在もJリーグは外国人選手を歓迎しており、2017年のシーズンからは外国人枠を今までの1チーム4人から5人に増やすことも決めた<sup>43)</sup>。

以上のように、日本国内の様々なスポーツで外国人選手が活躍し、さらに日本のスポーツの競技レベル向上にも貢献していると考えられる。

陸上競技も同様に、外国人選手が活躍しているスポーツである。2016年の実業団ニューイヤー駅伝では、出場した43チーム中、25チームに外国人ランナーが参加していた<sup>53)</sup>。2016年の箱根駅伝でも、5区でケニア人ランナーが区間賞を取るなど、外国人選手のパフォーマンスが目立つ競技大会である<sup>41)</sup>。

日本チームに初めて外国人ランナーが所属したのは、1984年にエスビー食品に所属したケニア出身のDouglas Wakihuriであった。Douglas Wakihuriは当時の中村監督の下、着々と実力をつけ、1987年の世界陸上競技大会のマラソン競技で優勝し、翌年の1988年のソウルオリンピック大会のマラソン競技でケニア人初となるメダリストになった。その後、1989年に山梨学院大学に所属したJoseph Otworい が箱根駅伝で初の外国人参加者となった。Douglas Wakihuri や Joseph Otworい の活躍もあり、多くの企業や大学が外国人ランナーをチームに所属させた。

しかしながら、陸上競技の駅伝競技に関しては、外国人選手の受け入れに対して、他の競技ほど積極的ではない。2006年に箱根駅伝は駅伝チームが登録できる外国人選手は2名までで、実際にレースに参加できるのは1名までと定めている。さらに、2009年には実業団駅伝でも走行距離の一番短い2区を外国人選手区間と設定し、外国人ラン

ナーは2区のみでの参加が認められるようになった<sup>15)</sup>。このように、外国人選手に対しての規制が増えているが、外国人ランナーが日本の陸上競技の競技能力の向上に貢献していると考えられる。さらに、その外国人ランナーのほとんどがケニア人ランナーであったという事実が存在する。

## 第2節 研究の必要性

2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会を控えている日本が、今後の陸上競技界で国際的に活躍し続けるためにも、外国人選手をどのように受け入れ、どのように彼らに対応していけば良いのかを考える必要があると思われる。

1984年以降、多くのケニア人ランナーが日本でトレーニングをし、競技能力を高め、国際大会などで成功しているが、そのケニア人ランナー達がどのように日本チームに入部し、なぜケニア代表でオリンピック大会に出場できたのかをまとめた先行研究が存在しない。

したがって、これまで成功してきた事例として、ケニア人ランナーがどのように日本の文化、環境、言葉の壁を乗り越え、パフォーマンスを向上することができたのかを検証することは、今後日本の陸上界をはじめスポーツ界の外国人選手受け入れる際のヒントになると思われる。

## 第3節 研究の目的

本研究の目的は、1984年～2008年の24年間の間、ケニア人ランナーが日本チームに所属するための導入期において、日本チームで5年以上トレーニングをし、ケニア代表としてオリンピック大会に出場したケニア人ランナーが、日本で活躍するために必要であった条件を明確にすることであった。

## 第4節 用語の定義

### 第1項 成功

本研究における成功とは、ケニア人ランナー「ケニア代表のオリンピック選手」における成功と定義した。

### 第2項 駅伝

本研究における駅伝とは、Carrick<sup>7)</sup>による「ロードレースの一種で、団体で行うチーム競技」と定義した。

### 第3項 日本チーム

本研究における日本チームとは、「日本の企業、大学、高校が運営する駅伝チーム」と定義した。

### 第4項 コーディネーター

本研究におけるコーディネーターとは、「ケニア人ランナーを日本チームに紹介するスポーツコーディネーター」と定義した。



## 第2章 先行研究

### 第1節 ケニア共和国

#### 第1項 基本情報

ケニア共和国は1963年12月12日に英国から独立した国である。2016年現在の総人口は4,725万人で、首都ナイロビの人口はおよそ390万人である。公用語はスワヒリ語と英語である。主な宗教は伝統宗教、キリスト教、イスラム教である。平均収入は一人当たり年間1,521ドルと日本のおよそ25分の1しかない。失業率は40%で日本の10倍以上である。ケニアの国土は日本のおよそ1.5倍の58.3万平方キロメートルある<sup>14)</sup>。

#### 第2項 スポーツ

ケニアのスポーツは英国の植民地であったため、ゴルフ、テニス、クリケット、サッカー、ラグビーなどが盛んである。ゴルフに関しては、ケニアには40個ゴルフ場があり、10個のコースでは試合なども行なわれている。ロイヤルナイロビゴルフクラブは1906年に設立したケニアで一番古いコースである。1967年にはヨーロッパゴルフツアーの中にあるチャレンジツアーがケニアでの試合をスタートし、今でも行なわれている。このように国際試合もケニアでは行なわれている<sup>29)</sup>。

### 第2節 ケニア陸上競技

#### 第1項 国際大会

ケニアのスポーツにおいて、一番輝かしい成績を残しているのが陸上競技である。陸上競技のスタジアムも国内に4カ所あるほど人気の高いスポーツで、一番大きいMoi International Sports Center – Kasaraniスタジアムは観客席収容人数6万人の施設である<sup>1)</sup>。ケニア代表チームが初めてスポーツで国際大会に出たのは1954年のコモンウェルスゲームズで、その後1956年のメルボルン大会で初めてオリンピック大会に参加した。

#### 第2項 マラソン

ケニアがマラソン競技で世界に知られるようになったのは、1983年のシカゴマラソンで、当時アメリカに拠点を置いているJoseph Nzauがケニア人ランナーとして初めて世界トップクラスの大会で優勝した時である。その後も、アメリカに拠点を置くIbrahim Husseinが1985年のホノルルマラソンと1987年のニューヨークマラソンで優勝している。しかし、それでもまだ世界トップクラスのマラソン大会に参加するラン

ナーは少なかったが、1986年にボストンマラソンで初めて賞金が出るようになった年から、ケニア人ランナーが世界中の大会で優勝するようになった<sup>51)</sup>。表1の World Marathon Majors(世界6大マラソン大会)での記録から、ケニア人ランナーの強さは明らかである。

表1. World Marathon Majors において、ケニア人ランナーの勝率

マラソン大会名	各大会でケニア人が初めて優勝した年から2016年までの間		2007年～2016年
シカゴマラソン	1983年～2016年	48%	90%
ボストンマラソン	1988年～2016年	66%	50%
ロンドンマラソン	1989年～2016年	43%	80%
ニューヨークマラソン	1987年～2016年	43%	50%
ベルリンマラソン	1995年～2016年	71%	60%
東京マラソン	2007年～2016年	50%	50%

※1987年ボストンマラソンはスポンサーが見つからず中止

※2012年のニューヨークマラソンはハリケーン・サンディの影響で中止

シカゴマラソンの1983年から2016年のデータは(Bank of America Chicago Marathon)<sup>9)10)</sup>より参照

ボストンマラソンの1988年から2016年までのデータは(Boston Marathon)<sup>9)</sup>より参照

ロンドンマラソンの1989年から2016年までのデータは(Virgin London Marathon)<sup>39)</sup>より参照

ニューヨークマラソンの1987年から2016年までのデータは(TCS New York City Marathon)<sup>38)39)</sup>より参照

ベルリンマラソンの1995年から2016年までのデータは(BMW Berlin Marathon)<sup>4)</sup>より参照

東京マラソンの2007年から2016年までのデータは(東京マラソン)<sup>50)</sup>より参照

2006年に World Marathon Majors が、スタートした翌年の2007年に、第1回東京マラソンが行われてから2016年までの10年間で、優勝したランナーの63%がケニア人ランナーである。次いで、優勝している回数が多いのはエチオピア人ランナーの25%である。

図1はマラソン競技において、歴代TOP 50(1924年から2016年)の競技記録ランキングを示したものである。62%がケニア人で、38%がエチオピア人であった<sup>20)</sup>。図2は2016年男子マラソンTOP 50の競技記録ランキングを示したものである。2016年も同様に、トップ50の中、32人(64%)がケニア人であった<sup>19)</sup>。

図1が示すように、ケニアは世界的長距離大国であることが明らかである<sup>24)</sup>。

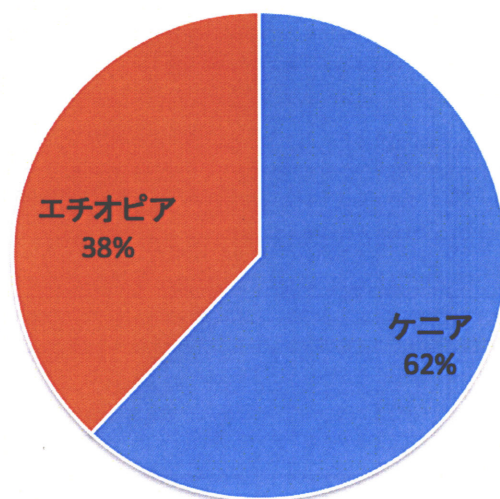


図1. マラソン男子競技記録歴代 TOP50(1924年～2016年)

IAAF ホームページ<sup>20)</sup>より編集

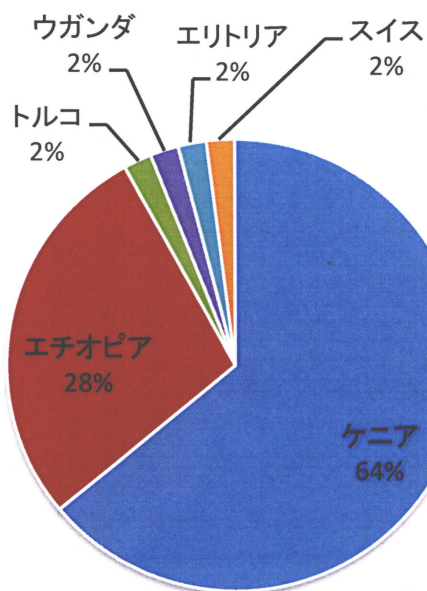


図2. マラソン男子競技記録 2016年 TOP50

IAAF ホームページ<sup>19)</sup>より編集

### 第3項 クロスカントリー

1986年に国際陸上競技連盟(IAAF)は世界クロスカントリー選手権大会に出場するための遠征費等が不足している国への支援を開始した<sup>51)</sup>。これを機にケニアは同大会への出場に力を入れるようになった。1986年の世界クロスカントリー選手権大会でケニアが初めて1位になって以来、2016年まで全ての団体戦でメダルを獲得している。すなわち、28大会中24大会で1位、3大会で2位、1大会で3位という好成績を収めている<sup>60)</sup>。

### 第4項 ケニアのオリンピック大会での実績

#### 1. オリンピック大会全体

初めて出場した1956年のメルボルンオリンピック大会ではメダルの獲得はできなかったものの、Nyandica Maiyoroが5,000mで7位入賞を果たすなど大健闘をした<sup>3)</sup>。

その後、初めてケニア人がメダルを獲得したのは、1964年東京オリンピック大会の800mで銅メダルを獲得したKiprugut Chumoであった<sup>51)</sup>。

結果的に、それ以来、2016年のリオオリンピック大会までに、ケニアは合計99個のメダルを獲得している。99個のメダルのうち、92個を陸上競技で獲得しており、残りの7個は全てボクシングであった<sup>28)55)</sup>。

#### 2. マラソン競技

1988年にDouglas Wakihuriが初めてケニア人として、マラソン競技のオリンピックメダリストになった<sup>51)</sup>。その後、1996年のアトランタオリンピック大会と2000年のシドニーオリンピック大会ではEric Wainainaが銅と銀、2008年の北京オリンピック大会ではSamuel Wanjiruがケニア人ランナー初の、オリンピックマラソン金メダルを獲得した<sup>55)</sup>。

### 第3節 ケニア人ランナーのトレーニング拠点の海外への移動

#### 第1項 アメリカへのトレーニング拠点の移動

1960年から1970年代は多くのケニア人ランナーがアメリカの大学に進学していた。アメリカの大学はその大学の名前を広く知ってもらうことが狙いでケニア人選手を入学させ、陸上部に入部させた。1960年後半にSteve Machukaがケニア人ランナーとして初めてコーネル大学に留学して以降、多くのランナーがアメリカの大学に進学していた<sup>3)</sup>。

## 第2項 日本へのトレーニング拠点の移動

日本に初めて拠点を移したケニア人ランナーは、1984年に日本企業の駅伝チームに所属した Douglas Wakihuri である。また、大学駅伝チーム 1989年に大学駅伝チームでは、箱根駅伝で初めて走ったケニア人ランナーは、山梨学院大学で 1989年に1年生ながら七人抜きを激走を見せた Joseph Otworl である。その後、数多くのケニア人ランナーが日本の企業、大学や高校に所属している。

## 第4節 海外エージェントからの高い評価

1990年代半ばになると、ケニア人ランナーの能力の高さは海外エージェントから高い評価を受けていた。したがって、アメリカや日本に拠点を置くより、ケニアに高地トレーニング施設を作り、そこでトレーニングした方が経済的であるという理由で、海外から選手を勧誘するエージェントが多くケニアに来るようになった。さらに、ヨーロッパの賞金大会で活躍したケニア人ランナーが他のケニア人ランナーの目標となっていた<sup>51)</sup>。

## 第5節 ケニアと日本の競技記録を世界記録とオリンピック大会記録と比較

表2はケニアと日本の競技記録を世界記録とオリンピック大会記録と比較したものである。男女共にケニアの方が日本より競技記録が高いのが明らかである。

特に男子は世界記録とオリンピック大会記録を複数所持していることから、長距離走において、世界トップクラスであることが明らかである。

表2. ケニア記録、日本記録、世界記録、オリンピック記録の比較

距離	ケニア記録		日本記録		世界記録		オリンピック大会	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1,500m	3:26.34	3:56.82	3:37.42	4:07.86	3:26.00 (MAR)	3:50.07 (ETH)	3:32.07 (KEN)	3:53.96 (ROU)
3,000mSC	7:53.64	9:00.01	8:18.93	9:33.93	7:53.63 (QAT)	8:52.78 (BRN)	8:03.28 (KEN)	8:58.81 (RUS)
5,000m	12:39.74	14:20.87	13:08.40	14:53.22	12:37.35 (ETH)	14:11.15 (ETH)	12:57.82 (ETH)	14:26.17 (KEN)
10,000m	26:27.85	30:11.53	27:29.69	30:48.89	26:17.53 (ETH)	29:17.45 (ETH)	27:01.17 (ETH)	29:17.45 (ETH)
マラソン	2:02:57	2:18:37	2:06:16	2:19:12	2:02:57 (KEN)	2:15:25 (GBR)	2:06:32 (KEN)	2:23:07 (ETH)

※BRN(バーレーン), ETH(エチオピア), GBR(英国), KEN(ケニア), MAR(モロッコ), QAT(カタール), ROU(ルーマニア), RUS(ロシア)  
ケニア記録のデータは(Kenya Athletics Page)<sup>27)</sup>より参照  
日本記録のデータは(Japan Association of Athletics Federations)<sup>28)</sup>より参照  
世界記録のデータは(International Association of Athletic Federations)<sup>21)</sup>より参照  
オリンピック大会のデータは(International Association of Athletic Federations)<sup>18)</sup>より参照

## 第6節 ケニア人ランナーの速さの秘密

### 第1項 ケニア人の DNA

東アフリカ長距離ランナーの DNA には、長距離に適した特有の DNA が存在するわけではなく、彼らと同じ DNA を持った民族は世界中に数多く存在している。つまり、長距離に適した DNA をケニア人ランナーだけが持っているわけではない<sup>34)44)49)59)</sup>。

Manners<sup>34)</sup>によれば、ケニアとエチオピアは、両国とも長距離においての高い競技能力で知られているが、DNA の結果を見ると同じ先祖から成り立っている民族ではないことが明らかである。したがって、長距離ランナー特有の DNA は存在しないと述べられている。東アフリカの選手の高いパフォーマンスは、環境が影響していると考えられる。ケニアで一番持久性運動能力の高い Kalenjin 族に関しては、部族内での結婚が多く、高地で生まれ育った彼らの DNA は長い間磨かれてきたと考えられる。すなわち、ケニア人のパフォーマンスの高さは、アフリカの貧しい経済状況から抜け出すことが、モチベーションになっていると述べている<sup>25)34)49)</sup>。

### 第2項 ケニア人の生理学的なパフォーマンス

持久性運動能力は、最大酸素摂取量( $VO_{2max}$ )、ランニングエコノミーや最大酸素摂取量時の速度が指標となって測定されている<sup>32)35)36)48)50)62)</sup>。

最大酸素摂取量に関しては、アマチュアランナーとエリートランナーを幅広く測定すると、エリートランナーの方が、最大酸素摂取量が高いので、長距離走の能力に相関関係があると考えられるが、エリートランナーのグループ内で測定すると、必ずしもそうとは言えず、最大酸素摂取量のみを長距離走における能力想定として使うことはできないと述べられている<sup>50)</sup>。

Saltin et al.<sup>48)</sup>がケニア人の子供達が育った環境によって最大酸素摂取量に違いがあるかを調査したところ、学校へ歩いて通った子供達の方が歩かなかった子供達に比べて最大酸素摂取量が 30%高いことを示した。しかし、これも直接、長距離走の能力に関係があるかは定かではない。ランニングエコノミーは持久性運動能力を測定する際に必要な指標の一つであり、ランナーがエネルギーをどれだけ効率的に使っているのかを測定するものである。例えば、最大酸素摂取量の低い選手と高い選手が一緒に 10km を走り、二人が同タイムでゴールしたとすると、最大酸素摂取量の低い選手の方が、ランニングエコノミーが高いこととなる。しかしこれも長距離走における能力測定の指標としては不十分である<sup>36)50)</sup>。

最大酸素摂取量時の速度は、最大酸素摂取量とランニングエコノミーを合わせて考えた指標となる<sup>50)</sup>。最大酸素摂取量が出現した時の走行速度を測定することにより、ラ

ンナーの競技能力をより正確に測定することができる<sup>36)</sup>。

### 第3項 ケニア人の育った環境

DNA と生理学的視点からの研究によると、ケニア人ランナーの強さの秘密は、育った環境などが大きく関係あるのではないかと述べている<sup>34)49)</sup>。

Onywera et al.<sup>44)</sup>の研究によれば、国際レベルの試合に出ている選手たちの81%が標高2,400mを超える Rift Valley 地域で生まれ育っていたことが明らかになった。さらに、その選手の75%が Kalenjin 族の選手であった。

ケニア人ランナーは標高の高いところで生まれ育ち、子供の頃から毎日長い距離を歩いたり、走ったりしていたこともあり、最大酸素摂取量やランニングエコノミーが高く、最大酸素摂取量時の速度も速いので、持久性運動能力が高いと考えられる<sup>48)</sup>。

## 第7節 ケニアの民族と部族の特徴

### 第1項 ケニアにおける民族と部族

表3はケニアにおける民族と部族の割合を示したものである。

ケニアには主に2種類の民族グループ(Bantu と Nilotic)が存在する。その2種類の民族の中にはさらに多くの部族が存在する。最も多い部族が Kikuyu 族である<sup>8)34)44)57)</sup>。

それぞれの部族には特徴があり、Nilotic 民族である Kalenjin 族はケニアに存在する多くの部族と似ていて放牧民族である。一方 Bantu 民族の Kikuyu 族は数少ない農耕民族である。したがって、Kalenjin 族と Kikuyu 族は文化も性格も大きく異なる。

表3. ケニアにおける民族と部族の割合

民族 部族	Bantu					Nilotic		その他	
	Kikuyu	Luhya	Kamba	Kisii	Meru	Luo	Kalenjin		
総人口 (%)	26%	17%	13%	7%	7%	15%	14%	1%	
	39,304,237	10,219,102	6,681,720	5,109,551	2,751,297	2,751,297	5,895,636	5,502,593	393,042

人口の割合データは(Central Intelligence Agency)<sup>8)</sup>を参照

### 第2項 Kikuyu 族の特徴

Kikuyu 族農耕民族で、ケニアでも最初に資本主義の考え方を取り入れた部族である。他の部族より教育も受けて育っているため、ケニアの多くの官僚や成功者の多くは Kikuyu 族である<sup>11)</sup>。

ケニアの歴代大統領の4名中3名は Kikuyu 族である<sup>2)</sup>。Kikuyu 族は起業家としての能力も他の部族より優れていて、ビジネスセンスがあると述べられている<sup>37)45)</sup>。Kikuyu

族は、それに加えて長期的に物事を考える能力も兼ね備えていると述べられている<sup>13)</sup>。

### 第3項 Kalenjin 族の特徴

Kalenjin 族は放牧民族で、家畜の餌を確保することに意識をおいており、乾季が長く続くと餌を求めて場所を移動する必要があった。よって、Kalenjin 族は文化的に一つの場所に留まるのではなく、場所を移しながら生きて行く必要があるという特徴があった<sup>12)</sup>。

### 第8節 Kalenjin 族と陸上競技における能力

陸上競技における能力という点で、最も好成績を残しているのは Nilotic 民族の Kalenjin 族である<sup>34)44)57)</sup>。

Kalenjin 族の強さは 1954 年に国際試合に初めて参加した時から 2016 年現在までずっと変わらない。1989 年までの国際競技大会記録の内、45%は Kalenjin 族の選手による記録であった<sup>44)</sup>。

図3は 1964 年から 1996 年までのオリンピック大会の男子陸上競技において、800m～10,000m の競技で獲得したメダルの割合を国別に示したものである<sup>34)</sup>。

Kalenjin 族は総メダルの 32%(26 個)を獲得し、メダル獲得全体の 41%を占めるケニアの 78%を Kalenjin 族が占めていた。金メダルに関しても同様に、Kalenjin 族は同期間で、金メダルを 30%(8 個)獲得している<sup>34)</sup>。



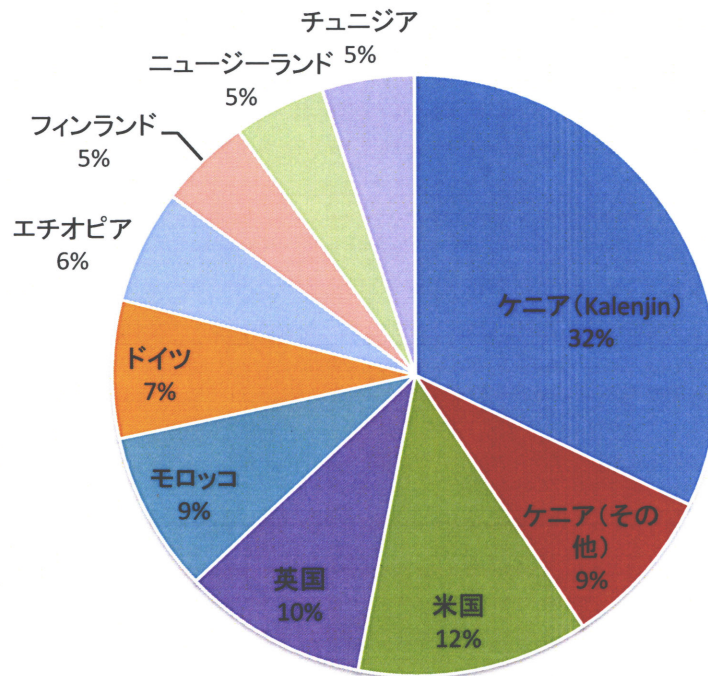


図3. 1964年～1996年オリンピックでのメダル獲得率(800m～10,000m)  
 ケニアがボイコットした1976年と1980年のオリンピックは除く  
 Manners<sup>34)</sup>.p.16より引用

Manners<sup>34)</sup>、Larsen et al.<sup>31)32)</sup>、Onywera et al.<sup>44)</sup>、Tucker et al.<sup>57)</sup>、Scott & Pitsiladis<sup>49)</sup>は Kalenjin 族の強さの秘密を、いくつかの観点から説明している。

Larsen et al.<sup>31)32)</sup> は、身体能力に着目し、最大酸素摂取量の部分利用率(酸素摂取水準)とランニングエコノミーが大きく影響し、さらに体格や育った環境も大きく関係していると報告している。

Onywera et al.<sup>44)</sup> は Kalenjin 族の選手が生まれ育った環境に着目し、以下の調査を実施した。

まず被験者をコントロール群、ケニア国内レベルの選手群、ケニア代表選手群の3群に分けた。その中でケニア代表選手群の81%が標高2,400mを超える Rift Valley 地域で生まれ育っていたことが明らかとなった。また、ケニア代表選手群の75%が Kalenjin 族の選手であった。さらに、ケニア代表選手群の81%は、学校に通う方法として、走って通っていた。その内、51%が毎日5km以上走っており、さらに23%は10km以上走っていた。この本研究のように育った環境が長距離走の能力を高める要因となっていたことを明らかとした。

さらに、走る動機を調査したところ、ケニア代表選手群の 33%が経済的理由と述べていた。その次に多かったのは才能があるからと、伝統がそれぞれ 18%であった。ケニアの失業率が 40%ほどで人口の 50%が貧困層にいることを考えると動機が経済的理由であることは不思議ではない。

Manners<sup>34)</sup>によれば、Kalenjin族が遊牧民族の習慣の中で走る能力を高めたのではないかと述べている。その習慣とは、Kalenjin族の男性は結婚をする時に新婦の家族に牛を渡すしきたりがあり、その際にKalenjin族の男性は多くの牛を捕獲するために牛を盗む風習があった。彼らは片道160km移動し、盗んだ牛と一緒にまた帰ってくる必要があり、その際に、元の持ち主に捕まらないように早く移動する必要があったので、長距離を走る能力が高まったのではないかと述べている。

## 第9節 日本チームとケニア人ランナーの関係

### 第1項 ケニア人ランナーが日本チームに勧誘された理由

日本の企業などがケニア人ランナーをチームに所属させるのには、経済効果が見込まれるからであると述べている。前述の通り、日本の企業なども自身の企業や大学などのPRとしてケニア人ランナーを起用している。

山田<sup>61)</sup>が行った箱根駅伝における広告効果の研究によると、媒体露出量を広告費換算にすると、およそ 19 億 5,000 万円に上り、広告効果は3倍の 58 億円以上と報告している。このように企業や大学が駅伝を通して得られる経済効果は計り知れない。

よって、ケニア人ランナーをチームに入部させることによって、駅伝競技が長時間にわたりテレビで放映される露出の経済効果は高いと述べられている。ケニア人ランナーの活躍は直接日本チームに貢献できるのである。

### 第2項 ケニア人が来日できた理由

ケニア人ランナーが日本のチームに入ることができたのは、コーディネーターKという人物の存在があったからである。コーディネーターKは拠点をケニアに置き、日本のチームからケニア人ランナーの紹介を依頼されると、ケニアで探した選手を日本のチームに紹介してきた。

Boundary spanner とは、お互いを知りえない人々や企業をつなげることである。お互いを知りえない人々が知りえない理由は、場所か役割的な理由が述べられる。更に重要な要素は、その boundary spanner が全ての関係者と信頼関係が気付いていることである<sup>16)59)</sup>。よって、コーディネーターKの役割は boundary spanner であったと考えられる。

## 第10節 コーディネーターK

### 第1項 コーディネーターKのケニアにおける活動

コーディネーターKは1977年にケニアに初めて行き拠点をケニアに置いている。日本に連れて行った初めての選手はタンザニアの選手だったが、その選手は日本チームに所属することは無く、レースに参加するためであった。

コーディネーターKは1984年に初めて Douglas Wakihuri を日本チームに紹介したのち、数多くのケニア人選手を日本のチームに紹介している。大学レベルでは、1987年に大学チームに紹介した Joseph Otworl はケニア人と初めてして箱根駅伝で走っている。1992年には、高校にも初めて男女2名ずつ紹介している。このように、コーディネーターKは次々と各レベルのチームにケニア人ランナーを紹介している。

コーディネーターKは2016年現在も、ケニアに拠点を置いており、ケニアで日本に紹介する選手の発掘を行なっている。コーディネーターKがケニア人を紹介した日本チームは全てのレベル、実業団「ニューイヤーズ駅伝」、大学「箱根駅伝」と高校「全国高等学校駅伝競走大会」でチームの優勝に貢献している。

コーディネーターKは1984年から2016年までの32年間の間に60人以上のケニア人ランナーを日本に紹介しており、複数の部族出身のランナーを紹介している。図4はコーディネーターKが日本のチームに紹介したランナーの出身部族を割合で表したものである。

日本チームに紹介したケニア人選手の83%が Kikuyu 族であり、陸上競技能力の1番高い Kalenjin 族の選手は4%に止まっている。

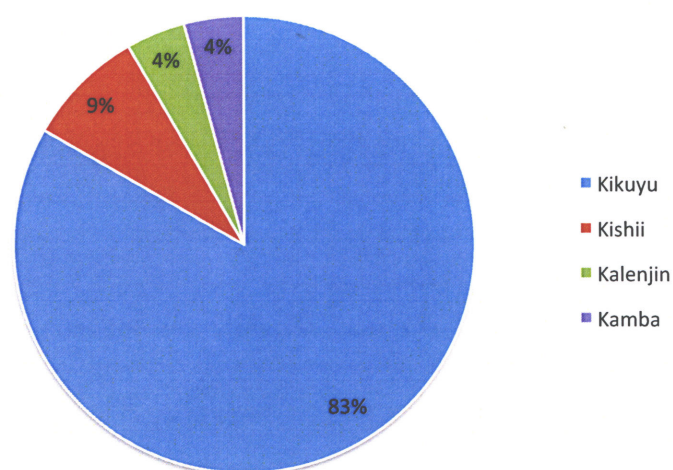


図4. コーディネーターKが日本チームに紹介した部族の割合

## 第2項 日本で活躍し、成功したケニア人ランナー

日本のチームに所属し、オリンピック代表に選ばれたケニア人選手は6名いる。男性が5名、女性が1名いる。その内、3名がオリンピックメダリストになっている。表4はコーディネーターKが日本チームに紹介してオリンピックにケニア代表で出場した6名の選手をまとめたものである。日本に多くの部族の選手が来ているが、成功したのはKikuyu族の選手のみである。

表4. コーディネーターKが日本チームに紹介して成功した選手一覧

	ランナー					
	A	B	C	D	E	F
所属した日本チーム	実業団	実業団	高校	高校	高校	実業団
性別	男	男	男	女	男	男
出場したオリンピック	1988ソウル マラソン 銀	1996アトランタ マラソン 銅 2000シドニー マラソン 銀 2004アテネ マラソン 7位	2008北京 マラソン 金	2000シドニー マラソン 4位	2000シドニー 5,000m finliast	2008年北京 10,000m finalist
部族	Kikuyu族	Kikuyu族	Kikuyu族	Kikuyu族	Kikuyu族	Kikuyu族

## 第11節 ケニア人による異文化での適応

異文化に適応するとは、その文化で生活をしたり、仕事をしたりすることに対する抵抗がどれだけ少ないか、ストレスが無いかを定義している<sup>2)</sup>。異文化に適応する難しさは、新しい文化の価値観や規範(常識)を、どの程度理解しているのかにかかっている。人は旅行などで新たな文化を一時的に受け入れるのには抵抗が少ないが、そこに拠点を置き、そこで頑張ると決めてできる人は少ない。Albrecht et al.<sup>1)</sup>はこのような人のことを“unique personality makeup”と呼んでいる。

Peltokorpi & Froese<sup>46)</sup>は異文化に適応する際に、どのような個人的要因が効果的なのかを明確にする研究を行っている。その研究によると、異文化を取り入れることに関して、スキル、知識、能力に比べて、性格がより重要だと述べている。異文化を取り入れる際に、まずは不確実性を減らすことで、新たな文化を快適と感じられるようになる。文化的に順応できている外国人は、異文化に対してオープンで、新たな常識や知識、習慣を自国の文化と融合することができている。

Kealey & Ruben<sup>26)</sup>によると、異文化に適応するためには、次の要素が重要と述べている。その要素とは、empathy, flexibility, respect, tolerance, interest in local culture and people, sociability, kindness, patience, intellectual curiosity, and open-mindedness の10個の要素である。

これらの要素を兼ね揃えている人は、オープンで様々なことに興味があり、他者との

信頼関係を築くことができる。さらに、彼らは他者の気持ちに敏感で、他者を尊重することができる。他者に対してポジティブで、中立的な立場に立てる人である。さらに、彼らは自分に対して自信があり、どんな状況でも冷静に対応できる真のある人と述べられている。

## 第3章 研究方法

### 第1節 調査方法

#### 第1項 調査対象者

本研究における対象者は、有意抽出法により以下の条件で選出した。

##### 1. コーディネーター

本研究の調査対象者はケニアに拠点を置きながらケニア人ランナーを日本チームに紹介している、日本人であった。また、コーディネーターとしての経験が30年以上ある人物であった。この条件を満たしている人物は1名であった。

##### 2. ケニア人ランナー

本研究において調査対象となったケニア人ランナーは、日本チームに5年以上所属経験のある選手で、さらにケニア代表としてオリンピック大会に出場経験のある人物であった。この条件を満たしている人物は6名であった。

##### 3. 日本チーム監督

本研究において調査対象となった日本チーム監督は、ケニア人ランナーが所属したチームの監督であり、指導したケニア人ランナーが、ケニア代表としてオリンピックメダリストになった選手の監督である。この条件を満たしている人物は3名であった。

#### 第2項 研究の調査期間

本研究の調査期間は、2016年9月1日から2016年10月20日までの2ヶ月間であった。

#### 第3項 インタビュー調査

本研究では調査対象者に対して、半構造化インタビューを行った。インタビュー時間はそれぞれ45分間程度とした。

#### 第4項 インタビュー内容

インタビュー内容は各対象者に対して、下記の通りであった。

##### 1. コーディネーターへの質問項目

表5は本研究において、コーディネーターへの質問項目を表したものである。コーディネーターとしての仕事を始めたきっかけや、どのようにケニア人ランナーと出会い、どのように日本に連れていく選手を選出したのかを明確にしようとした。

表5. コーディネーターへの質問項目

ケニアとの出会い
初めてケニアに行ったのはいつですか？
スポーツコーディネーターとしての仕事を始めたきっかけは何ですか？
ケニア人ランナーとの出会い
ケニア人ランナーを選ぶ際の基準は？
ケニア人ランナーが日本で壁と感じることはなんですか？
成功した6名の選手について
選手の第1印象は？
選手としての強みは？
日本で成功できた理由は？
日本に行ったことによって一番伸びた部分は？

## 2. ケニア人ランナーへの質問項目

表6は本研究において、ケニア人ランナーへの質問項目を表したものである。ケニア人ランナーのコーディネーターKとの出会い、日本の国や、日本チームでの体験談についてインタビューを行った。

表6. ケニア人ランナーへの質問項目

コーディネーターKとの出会い
コーディネーターKの第1印象は？
日本に行くとき聞いた時の感想は？
日本について
日本の第1印象は？
ホームシックになりましたか？
日本で順応するのに苦しんだことはありましたか？
日本チームについて
監督との関係はどうでしたか？
他の選手との関係はどうでしたか？
チームで練習やトレーニングをするのはどうでしたか？

## 3. 日本チーム監督への質問項目

表7は本研究において、日本チームへの質問項目を表したものである。日本チームの監督がどのようにケニア人ランナーを指導して、どのように接していたかを質問した。その他にも、日本チームの監督がどのように日本人とケニア人のチームを指導していたのかを明確にするものである。

表 7. 日本チーム監督への質問項目

日本人ランナーのみのチームについて
ケニア人が入る前のチームはどうでしたか？
上下関係（年齢）
出身地、出身校による関係
家族構成
タイム、能力による関係（上下関係）
その他で何か関係を分断する要素があったか？
ケニア人ランナーが入った後のチームについて
ケニア人ランナーが入った後のチームはどうでしたか？
上下関係（年齢）
出身地、出身校による関係
家族構成
タイム、能力による関係（上下関係）
その他で何か関係を分ける要素があったか？
チームの良い状態は変わることなく、今も良い状態ですか？
ケニア人ランナーについて
ケニア人ランナーをチームにスカウトした理由
ケニア人ランナーに対しての第一印象は覚えていますか？
ケニア人ランナーが初めて日本に来た時、その選手が苦勞していたことがあるように見えましたか？
ケニア人ランナーが入ったことによって、何が1番良く、何が1番難しかったですか？
難しかった事は、どのように解決しましたか？
ケニア人ランナーの活躍と成功
ケニア人ランナーが日本で活躍し、成功するために必要な条件と要素は何だと思いますか？
成功したケニア人ランナー達の共通点はありますか？
他競技でも外国人選手を入れるメリットやデメリットはあると思いますか？

## 第5項 倫理的配慮

本研究におけるインタビュー調査は、本学順天堂大学大判却の倫理ガイドラインの手順に従い実施した。インタビュー調査は以下の5点に関する内容を十分考慮した上、調査を行った。

1. 対象となる組織および個人の個人情報漏洩など、不利益がないように充分配慮する。
2. 得られたデータは、申請者が所属する研究室において入力および分析を行うこととし、外部には一切持ち出さない。
3. 対象となる組織および個人による調査への協力は自由意思によるものであることから、調査方法および個人情報などの留意について十分に周知した上で、調査協力への承諾を得るための入念な手順を踏む。また、調査対象者は、調査の協力を自由に自決することができ、そのために不利益を被ることはない。
4. 調査を行う際に、調査および研究の趣旨を伝え、書面において理解と同意を得た上で調査を実施する。



5. 本研究においては、対象となる組織および個人、その家族の思想や社会経済的な質問や精神的苦痛が予想される質問はしないことから、組織および個人との関係などにおける不利益は生じないと考えられる。

## 第2節 データ分析方法

本研究はインタビュー調査後、文字化されたインタビュー内容を、事前に設定した質問項目毎に内容の分類作業を行った。

本研究の具体的な分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach:以下 M-GTA)<sup>30)</sup>を援用した。M-GTA の特徴として、データの切片化はせず、抽出された全てのデータをコンテキストで見えていき、そこに反映されている人間の認識や行為、そしてそれに関わる要因や条件などを詳細に検討していく方法である。したがって、データを解釈していく上で、ある切片から概念を生成することもあれば、数ページに渡って述べられている内容をひとつの意味として概念化する場合もある。なお、分析は以下の手順に沿って行われた。

### 1. 概念化

本研究のインタビュー調査から逐語化されたデータに着目し、分析テーマと関連性のある箇所に研究の焦点を合わせた。本研究のテーマを十分に理解した上で、抽出された箇所のコンテキストの解釈を試みた。その後、それらの箇所とそれ以外のデータを比較した上で類似したデータの有無を確認し、具体例が一致した際には「定義」、または「概念名」をそれぞれ生成した。また概念を生成する際に、対局比較を行い、データの中の具体例に対して反対の場合を想定し、データでその有無を確認した。この作業を繰り返し行い、特に具体例が類似しないデータに関しては有効でないと判断し、分析の対象から除外した。

### 2. カテゴリー化

類似点が一致し、概念化されたデータは、その後、他の概念との関係性を吟味した上で、共通する概念を基にカテゴリーの生成を試みた。

### 3. 結果図の生成

分析結果の全体(カテゴリーと概念の相互関係)を、図で表した。

#### 4. ストーリー化

分析結果を確認する為に、生成した概念とカテゴリーだけを用いて表した図の説明を簡潔に文章化した。

#### 第3節 分析の質の確保

本研究では、以下の作業を行い、結果の質を担保した。調査対象者のインタビューを基に概念化、カテゴリーに分け、表8から表10を作成した。表8を基に結果図6を作成し、表9を基に結果図7を作成し、表10を基に結果図8を作成した。

その後、3名の有識者にその表8から表10と、結果図5から結果図9に対する指導を受けた。

## 第4章 結果と考察

### 第1節 結果

#### 第1項 コーディネーターKとケニア人ランナーと日本チームの関係

図5はコーディネーターK、ケニア人ランナー、日本チームの関係を表したものである。

コーディネーターKの果たした役割の流れは、下記の通りとなっていた。

最初に、日本チームがコーディネーターKに、チームのパフォーマンスを上げるためにケニア人ランナーを紹介して欲しいと依頼をする。

2番目に、依頼を受けたコーディネーターKは、独自の方法で選んだケニア人ランナーを日本のチームに紹介する。

3番目に、日本チームに所属したケニア人ランナーは駅伝やレースなどで走りのパフォーマンスを通してチームに貢献する。

4番目に、ケニア人ランナーはパフォーマンスの見返りに報酬をもらう。高校、大学レベルのチームでは現金の報酬ではなく、奨学金や生活費の免除などを受けている。一方の企業に所属した選手は給料をもらっている。

5番目に、コーディネーターKは、ケニア人ランナーを紹介した見返りに顧問料の報酬を受け取っている。その際に、コーディネーターKはケニア人ランナーの全てを日本チームに委託している。

最終的に、この流れが構築するとケニア人ランナーから日本チームを紹介して欲しいと依頼が入るようになるが、基本的には日本チームのオファーありきでコーディネーターKは動いている。

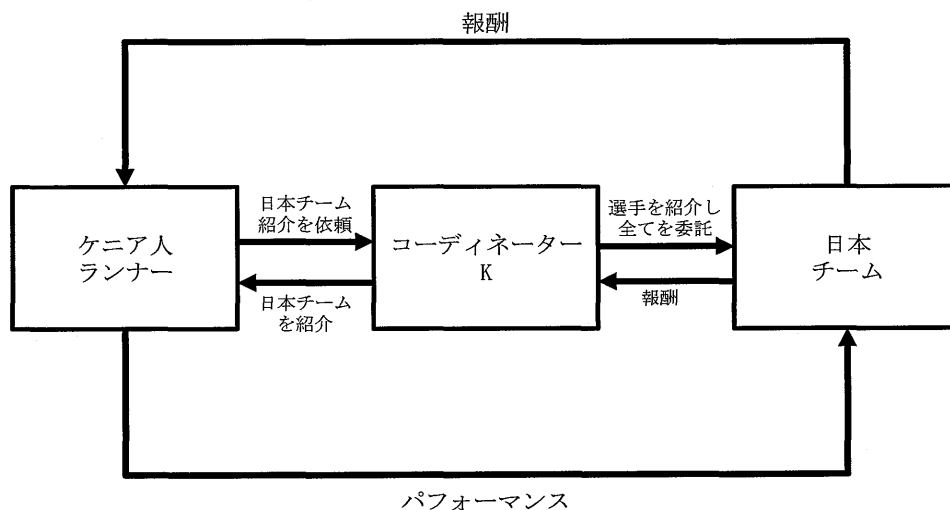


図5. コーディネーターK、ケニア人ランナー、日本チームの関係

## 第2項 コーディネーターKと日本チームとケニア人ランナーの3者が求める要素

### 1. コーディネーターKがケニア人ランナーに求める要素

表8はコーディネーターKのインタビューの内容から概念とグループ分けを行った表である。図6は、コーディネーターKがケニア人ランナーに求める要素を表した結果図である。

【】はカテゴリーを表し、〈〉は概念を表している。

コーディネーターKは、まず始めに、選ぶ選手の【競技能力】と【性格】に着目している。日本チームのパフォーマンスに貢献するためには、基礎となる【競技能力】が必要となる。

コーディネーターKはケニア人ランナーの【競技能力】を測るため、〈タイムトライアル〉を実施し、各ケニア人ランナーのタイムと〈走るフォーム〉や足の着地方法によって日本チームに紹介する選手を選出している。

【性格】という要素で、コーディネーターKが大切にしているのは、〈性格が明るい〉、〈真面目〉で〈聴く力がある〉、選手である。コーディネーターKによると、〈性格が明るい〉選手は、抵抗なく日本の文化に慣れたと述べている。

次に、ケニア人ランナーの【日本への適応】が重要となる。ケニア人ランナーが〈日本が好き〉であることと、〈順応性があった〉ことによって、日本に適応することができたのである。ケニア人ランナーが日本に初めて行った時は全員若く平均年齢は16.2(±1.3)年であり、日本の文化や食生活、言葉などに順応できた。

次に【ケニア人の向上心】と【日本チームのサポート】を受けることが必要となる。【ケニア人の向上心】とは、まず〈練習熱心〉であるかどうかである。日本チームに所属して成功した選手は全員、〈練習熱心〉であった。さらに、ケニア人ランナーに〈我慢強さ〉があり、どんな練習メニューを与えても文句を言わずに実践できるかが重要になる。最後に、〈セルフコントロール〉も重要になり、自分の体調管理などができている選手の方が、怪我なく長い現役生活を送れるとコーディネーターKは述べている。

【日本チームのサポート】とは、〈指導者に恵まれた〉ことである。ケニア人ランナーのことが好きで、ケニア人ランナーを育てたい気持ちを持った指導者に恵まれたことである。他には、ケニア人〈選手のケアをしていた〉。高校では学校で唯一のケニア人にならないよう、3年生の時に新たに1年生のケニア人ランナーを入学させるなどして、ケニア人ランナーの心のケアもしていた。さらに、〈食事のサポート〉もしていた。ケニア人は焼いた肉(ニヤマチョマ)が好きなので、競技会などで良いタイムを出すと、焼肉に連れて行ってもらうこともあった。このように、【日本チームのサポート】を受けることによって、【チームの一員になる】ことができる。

【チームの一員になる】とは、日本では長距離走のチームは駅伝に出ることが目的なので、そのチームのパフォーマンスに貢献できるかが重要である。よって、長距離走は個人競技のようであり、実際は日本ではチーム競技の要素が多いため、【チームの一員になる】ことが重要である。

最後に、全ての要素のベースとなるのが、ケニア人ランナーの【金銭的欲求】である。【金銭的欲求】とは、もともと貧しい環境で生まれ育っているケニア人ランナーにとって、陸上競技でお金を〈稼ぐ意欲〉が重要となる。本人はもちろん、家族を養う方法となる。貧困から抜け出すための術が、ケニア人ランナーにとっての陸上競技である。ケニア人ランナーは日本に来る前からすでに【金銭的欲求】があり、日本でチームの一員になってからも続けて【金銭的欲求】が継続してあると言える。

表 8. コーディネーターK がケニア人ランナーに求める要素

カテゴリー	概念	
チームの一員になる	駅伝文化	日本は駅伝中心だから、日本はマラソンより先に駅伝だから、高校にしる、大学にしる、実業団にしる、駅伝だから、だから私のビジネスは日本に駅伝があったら成り立ったんだから、マラソンだけだったら、私のビジネスは成り立たなかったよ
競技能力	タイムトライアル	5,000mのタイムトライアルを原則3回行っている タイムトライアル、フォームと足の着地で選ぶ
	走るフォームが良い	走るフォームがダイナミックで素晴らしいかった 走る姿を見た時はこんな素晴らしい走りをする少年がいるのかとびっくりした 綺麗なフォームで走る裸足の少女がいたのがこの選手 長距離を走る為に生まれてきたようなもんだよ。むかしザトベックという選手がいたが、走る機関車だね
性格	我慢強さ	ダグラスワキウリは中村監督がケニアのお袋さんに会いたくなくて言われるまで、4年間、一度もケニアに返してくださいって言わなかったよ
	聞く力がある	実業団の監督に指導を受けてからめきめき強くなり出した食べ物に好き嫌いがなく性格と一緒にでもくもくと食べていた
	性格が明るい	根あかな明るい性格の子 あかるい性格なので、日本の文化に馴染むことができた
	性格が明るい チャレンジ精神	日本の文化、習慣に抵抗無く慣れたね ねあかな性格だから何にでも馴染もうとした マラソンに必要なのはねあかな性格なのでは
	真面目	まじめな青年だと思った
日本への適応	日本文化に慣れた 責任感が強い	特に責任感の強い選手だったので、駅伝も安心して任せることができ、それが日本文化に順応できた要素の一つ 日本文化を吸収したケニアから日本にいった最高のランナーだった。食べ物は納豆もOKだめだったのは塩カラだけ。元来ケニア人はお米が好きなので米食に合った
	日本が好き	選手も日本を好きにならないと、強くならないよ。
	順応性があった	若さと好奇心があったので、日本の文化に順応できた 一言で言えば若さがあったから順応できた 順応しなければK社で生きていけないことを彼なりに理解したのでは キク族は賢い部族なのでは
ケニア人の向上心	練習熱心	練習熱心だね、ポテンシャルよりも練習熱心、それが第1要因ね、それしか無いね、練習が嫌いの、それは強いんがいたよ、日本に連れてきた選手もたくさんいたよ もくもくと練習するじみな性格自分から話すことがない よく練習をする 走りや良いんだから 走ることが好きでよく、僕は 走ることしか能がないとっていた 練習熱心 走ることが好きで、朝練、トラックでのスピードトレーニングと、ただひたすらこつこつ続けた。 日本の長距離トレーニングはもくもくとやるのでびったり合った 走ることが好きで、練習もよくした 天性に才能、それに練習、自分で走ることが興味だっていた
		我慢強さ
	セルフコントロール	フルマラソンに年に2回までだよ、1回は国のために、1回は自分のために、ハーフは年4回までだよ。 ダグラスにしる、エリックにしる、ワンジルにしる、それ以上は走るなよと、フルマラソンは足を故障するのが関の山だよ
	金銭的欲求	稼ぐことにがむしやらだったね金をためて仕送りするんだが口ぐせだった みんな貧しいんだよ、走る出稼ぎ労働者 銭にしたたかなのが成功する
	日本チームのサポート	指導者に恵まれた SBの中村監督、コニカの酒井監督、仙台の渡辺監督、共通してたのは、ケニア人が好きだったね、ケニア人を育ててみたいという、憧れを持っていたね、ケニア人のランナーを、あれだけのポテンシャルと持っている国の選手なんだから、指導いかんによっては結果伸びるだろうなっていう、指導者としての憧れをもっていたね。 選手のケアをしていた 高校では、生徒が9年生になる時、1年生を新たに入学させる、ホームシックにならない工夫だね 食事のサポートをしていた 記録会でいいタイム出したりすると、焼肉屋に連れて行ってあげたりする、寮では、やはり、日本食が、主体なのでケニアの選手は 焼肉 (ニヤーマチヨマ) は嬉しいからね、

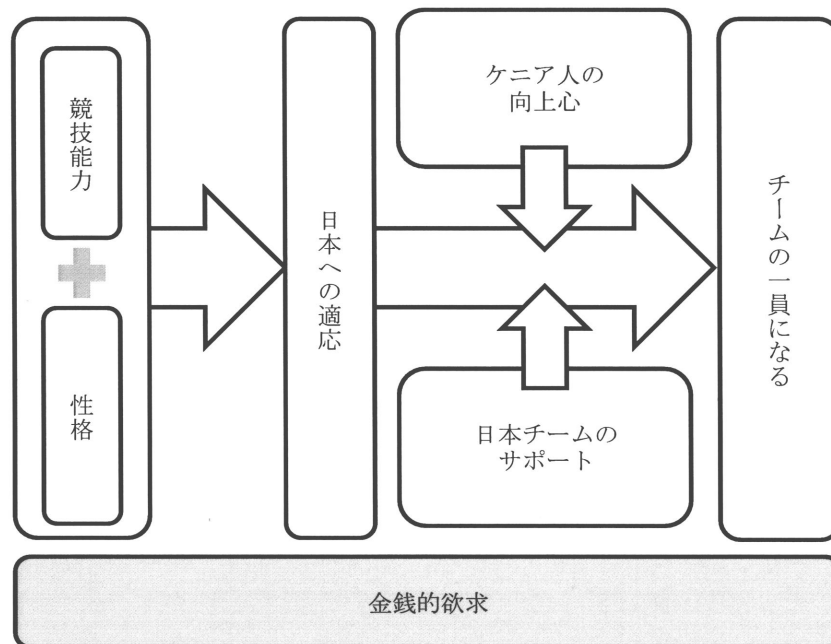


図6. コーディネーターKがケニア人ランナーに求める要素

## 2. 日本チームがケニア人ランナーに求める要素

表9は日本チームの監督に行ったインタビューの内容から概念とグループ分けを行った表である。図7は日本チームがケニア人ランナーに求める要素を表した結果図である。

日本チームは、ケニア人ランナーを駅伝チームのパフォーマンスを上げるために日本に呼んでいるため、【チームの一員になる】選手かどうか重要となる。

【チームの一員になる】とは、ケニア人ランナーが〈チーム意識〉を持って、他の日本人選手と一緒に練習ができるかが重要となる。ケニア人ランナーの能力が〈日本人とレベルが近い〉ことによって、〈日本人選手を引っ張る〉こともでき、日本人選手と一緒に成長することが可能となる。ケニア人ランナーが日本の文化に受け入れようと努力をしたり、〈日本人に貢献する〉ために、一緒に練習をしたりペースメーカーの役割を担ったりすることも、ケニア人ランナーが【チームの一員になる】のに必要な要素となる。

ケニア人ランナーが【チームの一員になる】ことができた後、【ケニア人の向上心】と【高い目標】を持つことが重要となる。

【ケニア人の向上心】とは、〈素直〉に人の意見を聞く力や、何にでもチャレンジする〈好奇心〉が必要である。成功しているケニア人ランナーは練習環境や、慣れていない状態などにも〈文句を言わない〉で頑張れる力がある。

【高い目標】とは、ケニア人ランナー自身が〈高い目標を持っている〉ことであり、

オリンピックでメダルを取ると決めて、それに向かって頑張る状態である。〈目標〉と〈ガッツ〉のある選手が【高い目標】を常に持つことができる。

【チームの一員になる】ことができた後は、【ケニア人の向上心】と【高い目標】を持つことにより、ケニア人ランナーの最終的な【パフォーマンス】につながるのである。

【パフォーマンス】をだすとは、ケニア人ランナーが自身の【パフォーマンス】を上げることにより、チームの【パフォーマンス】を上げることにも直接関わってくる。ケニア人ランナーが〈日本人とレベルが近い〉状態で日本チームに所属し、同じ環境で練習をした結果、オリンピックメダリストになれると、周りの〈日本人選手の目標となる〉ことにも繋がり、日本人選手も何をすれば良いのかが見えてくるのである。

ケニア人ランナーが、チームの一員になれたとしても、継続的に日本に残り、チームと一員として活動し続ける必要がある。よって、ケニア人ランナーの【忍耐力】が全てのベースとして必要となる。日本チームに所属している全てのランナーは、駅伝競技に参加することがメインになるので、ケニア人ランナーも簡単に諦めてしまうようでは、駅伝などで、大役を任せることができなくなるのである。よって、ケニア人ランナーが〈1つの場所にとどまる〉ことができ、〈我慢強さ〉があることによって、長い期間日本で頑張ることができるのである。



表9. 日本チームがケニア人ランナーに求める要素

カテゴリー	概念	バリエーション
忍耐力	我慢強さ	一つの場所に止まって、根強く頑張る、簡単に言うとかクマの農耕民族、カレン人が放牧民族、そう言う、一つの場所に止まって頑張れるっていうのが、日本で成功する要素なんですか？ 酒井：我慢強さがあるよね。うちでは、クマユシかないのかな？
	1つの場所にとどまる	クマユが結構良いのでは無いかな？っていう結論にもいく感じですかね？ 酒井：ま、多分、家族構成とか生活環境とか、宗教とか、いろいろあるのかな？ 長くいれるって言うのは、逆に出て行く選手は、そういう日本の実業団っていうチーム、ま、サラリーもらいながら走るっていうよりは、一発こっきりで、いっぱいもらった方が良いて言う、長くいれば良いてことがなると言っても、分かる人と分からない人がいるからね、やっぱり分かる人間は長く日本にいるしね。
ケニア人の向上心	素直	なぜその好奇心があるかないかと言うと、彼は物怖じしなくて、彼はなんでもトライしてみれば自分にものにしたと言っているがあるけど、そうじゃない人間は、俺はこれで良いて、固めるじゃないですか？彼はそこがなかったんじゃないかな？ これは日本人に限らず、世界のスポーツなんでもそうだと思うけど、素直に人の意見を聞ける耳を持っている人間が大きく伸びてるんじゃないかな？
	好奇心	なんでもチャレンジしてやるっていう気持ちが強くて他のケニア人だと、俺はこれほしなとかあったけど、彼はなんでもかんでもやってみようとその好奇心があるので、その好奇心がやっぱり、そのオリンピックに行くとかね、そう言うものがあつたんじゃないかな？
	しんがある	穏やかなのがワイナイナ、ものすごく最初はね、今はあちこちあちこちで、最初はシャイで、非常に素直で良い選手になっていっているのがあって、自分の中では、素直で、ま、しんの持っている選手は強くなると思っていたんで ま、エリックを取ったという、2ヶ月くらいテストを見て、カリウキの方がスピードもあって使えそうだったけれども、ま、それで皆んなと仲良くはやっていたけど、ワイナイナはそうじゃなくて、でも見ていると以外としんがなくて、もくもくとやっていたと言うのが
	文句を言わない	日本に来たらアサファルトがあるから練習ができないとか、これでさせるとか、全然なくて、最初からここ走れと、わかりましたって、文句は言わない、それで靴をね、これ合わないからこれはつけて買ってあげると、それをずっと履いてるし、そういう素直性はあるよね
	順応性が高い	はっきり言ってカリウキとエリックがいて、ワイナイナ強くなかった、カリウキの方が強かった、ただ、性格的にはワイナイナが日本的だし、それで、遅かった、で、一緒に強くなってくれるかなって、18、19だったんで
チームの一員になる	チーム意識	日本のこういう駅伝チームの取りまてていく中ではすごく必要な要素なんですかね？（一緒に強くなるう） 酒井：うん、そうだね うちはそうでも、最初はなんか、こう、助っ人みたいな感じにチームに交わらずに俺は俺だけ走る時だけ、そう言うのが文化に無くて、一緒にやっていたこと あとはメンバーシップもあるし、チームの中でいく強くなつて、他のメンバーが彼らを尊敬して、ま、仲間として見なかったら、彼らの力も出せないし、そう言うキャラクターの持ち主じゃないと、日本では力が出せ無いか、パフォーマンスだけじゃ無いかね 今のうちのクイダだったら日本人のためにベースメーカーやるとか、そんな中でいろいろやってくれたら、それは進んでやるし、嫌とは言わないよね
日本人とレベルに近い	ワイナイナはそうじゃなかった、皆んなと一緒に強くなろうという、チーム意識が、うーん	
日本人に貢献する	嫌なこともやってくれるしね、それで他のケニア人はワイナイナは今いるクイダとかもすごく良いんだけど、もうちゃんと日本に溶け込んでやろう、文化をどうにか自分で取り込もうというのがあるけど、俺はケニア人だからこれはダメとかね、やっぱり食わず嫌いかね、そう言うのが多かった、そう言う選手はあまり、長くいないね、日本にね、やっぱり日本の文化になじんで行こうとか、ま、食生活とかそうだし、日常生活もそうだし、いろいろなものになじんで行こう、	
日本人選手を引っ張る	ケニア人より早くなるとか簡単に言うけど、我々の文化があって、歴史があって、でもそうじゃないの、受け入れる側と、ただ、入れればと、後、個人の1選手、日本人選手達の尊敬とかがなきや、絶対に結果はでないですよ。 ワイナイナという人間自体はあの、はっきり言って、さっきは助っ人っていう言い方したじゃないですか？私はワイナイナは助っ人じゃなくて、今いる監督、磯松がそのあとに入ってきたんだけど、日本人の目標だみたいな 一般の生活と競技は違うので、それはきちんと割り切ってやってやらないと、選手はやっぱりモチベーションが下がるのでね、強ければ何やっても良いだろ、ではなくてね、逆にならなければならぬほど、注目されるからやっぱり、なんだろうな、率先、炊飯料みたいなのをしないといけないみたいなのはしてきましたね。 日本にいる選手、タヌイ、九龍工にいる、彼なんかもすごく、優しいって言うか、すごく日本に協力してくれるし 打ち解けてそうなのが、カリウキ、やっぱりぱつとできるから、ただ、ワイナイナは時間がかかりそうだけど、ま、見てて、うちのチームの選手と同じ様な力なので、それでこつこつ練習するし、こういう彼がいる事によって、うちの選手が伸びるかなと	
高い目標	高い目標を持っている	あとはもう本人が来た当初から俺は金メダル取るんだ、お前ふざけんかとずっと言っていたけど、だからそう言う人間、うん、 基本的には、ワイナイナに関しては高い目標を持って、ずっと自分でワードにして、never give upっていうモットーとしてやっていたので、日本人より純粋に持っていたかな？
	目標ガッツ	あんなに来てすぐ、札幌ハーフですぐ2番になったり、そう言うのがあって、以外と非凡なところはあつたかな、以外とガッツあるんだってところはあつてね
パフォーマンス	日本人に貢献する	日本はずっと基本的にルールがあって、住んでいかなきゃいけないし、そんな中で、みんなどうにか盛り上げていこうって言うのがあるし、ま、例えばワイナイナの時は、弱い時は僕がベースメーカーになってやるとか、
	日本人とレベルに近い	一緒にらいでして、トラックの練習は彼自体は彼は5000だって、14分台だし、1万だって、28分48ぐらいしか持っていないから、日本人と同じくらいで、丁度良いベースメーカーとか練習相手にはうまく使えた
	日本人選手を引っ張る 日本人の目標となる 日本人とレベルに近い	努力するっていうのはすごい、それでうちのチームが強くなったっていうのはワイナイナの影響もあって、シドニーで銀取った、アトランタで銅取った、っていう中で、彼の練習をうちの選手は見てるんですよ、そうするとなぜ彼が強くなったのか、わかっていて、じゃ、それは何かと言うと、普段そのフリーって言う時間も練習とか、自由の時間に彼は練習をしている、と言うのが、あれワイナイナじゃないか？っていう時に、あ、またあいつこんな練習してるわっていうね、じゃ、しなきゃいけないかって

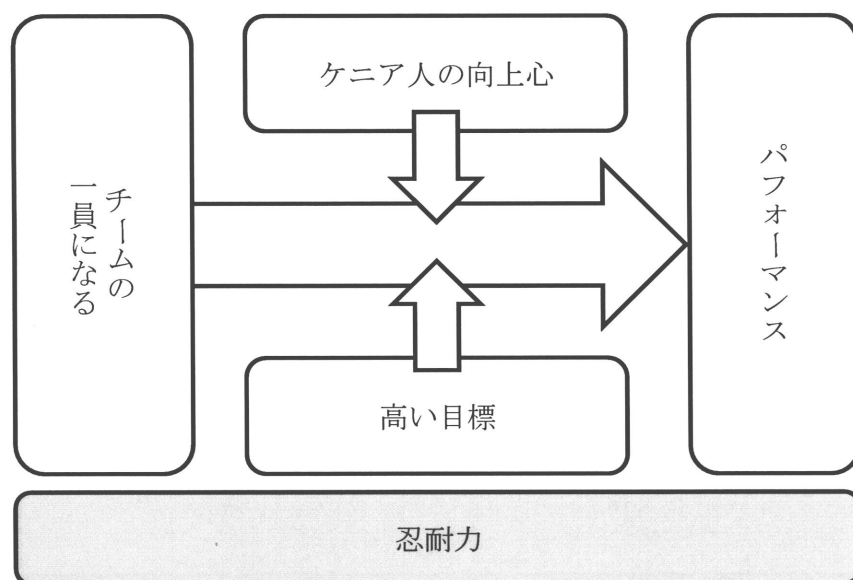


図7. 日本チームがケニア人ランナーに求める要素

### 3. ケニア人ランナーが日本で成功するために必要な要素

表10はケニア人ランナー2名に行ったインタビューの内容から概念とグループ分けを行った表である。図8.はケニア人ランナーが日本で活躍するために必要な要素としてあげている内容を表した結果図である。

ケニア人ランナーは日本に来ると、まず【日本の習慣に対する障害】を経験する。【日本の習慣に対する障害】とは、文化、言葉、食事、などケニアとは違う全てのことに対しての〈カルチャーショック〉である。それは、時には〈壁〉となり、時には〈ホームシック〉になる要因にもなり得る。赤道直下のケニアから来るケニア人ランナーにとっては冬の寒い〈気候〉も障害となる。しかし、ケニア人ランナーは日本に来たからには、日本の文化を取り入れるしかなく、それぞれ慣れるのにかかる時間は異なる。【日本の習慣に対しての障害】は【日本チームのサポート】と【ケニア人ランナーの順応性】で乗り越えることが可能となる。

【日本チームのサポート】とは、監督やチームメイトなどが、競技の中で〈サポート〉してくれることである。同じ環境で練習している中、ケニア人ランナーと日本人ランナー〈平等〉に扱うことにより、ケニア人ランナーがより心地よい環境になるよう努力してくれることである。さらに、文化に慣れるためのサポートは日本でお世話になる日本人家族や、学校などの〈友達〉も含まれている。

【ケニア人ランナーの順応性】とは、日本の文化に慣れることであるが、選手によって慣れるのにかかる時間は異なる。ケニア人ランナーによっては、すぐに慣れる選手もいれば、1年かかった選手もいた。しかし、どれほど時間がかかったとしても、慣れる

しかない状況に立たされており、時間がかかっても〈順応〉することができたのである。さらに、〈日本に順応〉するためには、日本〈文化の理解〉が必要となる。ケニア人ランナーが日本の文化などを乗り越えることにより、そこで【チームの一員】になることができるのである。

ケニア人ランナーが【チームの一員】になるとは、他の日本人の駅伝チームランナーと〈チーム意識〉を持ちながら練習を一緒にやり、チームに受け入れられていると感じるかである。ケニア人にとって、物事を時間通りに行うことは難しいが、日本で【チームの一員】になるとは、時間通りに〈タイムマネジメント〉をし、チームと一緒に行動がとれるかが重要となる。

ケニア人ランナーは日本に来る前から、1)【自己効力感】、2)【目標意識】、3)【向上心】の3つの要素を兼ね揃えている必要がある。この3つの要素は常に持っていることで、日本【チームの一員】になるまで至るプロセスを乗り越えることができる。

【自己効力感】とは、ケニア人ランナーがまず〈自分を理解〉し、〈タイムマネジメント〉が上手いことが重要となる。ケニア人ランナーは自国から遠く離れた日本で、〈自分で頑張る〉必要があり、〈自分を信じる〉中、〈プラス思考〉な一面を持ちながら〈自分で頑張る〉必要がある。何がなんでも〈成功する〉ことを信じて日本チームに入ることを決断していることである。

【目標意識】とは、ケニア人ランナーが日本チームに所属する前から持っている、オリンピックでメダルを取りたい気持ちや、成功することへの強い気持ちのことである。さらに、【目標意識】は日本にいる間に強くなり、日本で〈我慢強く〉残り、さらに大きな〈目標〉が見出され、最終的に〈目的達成〉をすることができる。

ケニア人ランナーの【向上心】とは、〈チャレンジ精神〉を持ち何にでも挑戦し、〈練習熱心〉である状態である。どんな練習メニューを出されたとしても、どんなに勉強が大変であったとしても、努力をすることができる選手は【向上心】があるのである。

表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素①

カテゴリー	概念	
日本の慣習に対する障害	壁	I have no choice of feeling comfortable because first and most is I went there when I didn't understand the language. You can imagine and you were supposed to understand what your coach is saying and perform. For me everything was difficult, language, food, and the culture of the Japanese and Kenyan is so different.
	カルチャーショック	My first impression was that because of the technology and all that stuff we used to hear from, from the media, you know given back history that it is always so developed technologically and all that. Everybody we thought, I thought everybody would speak English. First time in Japan, OK, buildings were big, that is one thing, and it was clean, and there were so many cars and people.
	ホームシック	Yes, for the first couple of months I was very homesick, but not otherwise
ケニア人の順応性	気候	The summer was not so bad for me, but the winter was so cold.
	日本に順応	At that point, as a foreigner you are only left with one choice. Within your culture you have to withdraw 50% of your culture to absorb 50% of the new culture that you are trying to accommodate. The only best thing to do is to keep myself as a 50% Kenyan but get another 50% or as much as I can get to make it 100% every human being must be 100 in whatever way we choose and that's why I decided to be better on one side or the other side because you are 100% because you choose to reject what you don't want and you choose to accept what you want. That's what makes you perfect. I was in a situation whereby I had to learn as quickly as possible. It is not how long, if you don't have time, it is you to create time within the busy schedule in your life now that you are engaging two cultures at the same time. Okay, then when you come to food yeah, I know I have rice, rice was very easy because I could understand rice and it would – much the fish and all those other stuff but to me at home I'm okay. There was not a problem with me with food because I made my decision a long time ago that I'm gonna eat what I feel like eating. I'm not gonna eat what's, because I have to eat because it's a culture. I don't think, there was nothing that made me feel uncomfortable.
	文化の理解	Number two, I think is the culture, the culture, why do, if you look at why a culture exists it's because it's conservative, right?
	順応	(How long would you say it took for you to get used to the lifestyle, the culture, how long did it take?) About 1 year. In the beginning I was at a home stay, so I was forced, I had to force myself I had no choice, and you were forced to eat, because there was no otherwise
	日本チームのサポート	日本を信用 I think your new family will – be good to your new family because they are the only people who can help you.
	日本人と平等	The coaches were also friendly, they did what ever I asked them to do they did for me, and do what they think is good for me. There was no difference between me and them most of the time.
	平等	(Do you think the coaches in Japan, did they treat you differently compared to the other Japanese runners?) No, the same. Exactly the same. (Even if your special the coaches treated you the same?) No, no we were still the same. Yes, because everything you are doing is the same, and that is the one I told you, if you do the same thing you don't have stress. You don't say I am doing more than this one
	サポート	Yes made me so, and also the teachers. (More comfortable in Japan) You know, you can not be successful when you are alone. You must have supporters. Because even when I was going to the Olympics, I had so many supporters at work. They were the first ones to make me go for marathon in Osaka, and the one who made me to do good.
	友達	I think first of all the friends in high school. You know, making friends makes you know more, and you don't have a lot of stress.

表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素②

チームの一員になる	チーム意識	(Did you feel part of the team?)Yes especially when we trained for the ekiden we did it together
	タイムマネジメント	The most important thing for any young person life is to be able to have a time management system because that's what makes you perfect. Everything you will do on time and that's why you see most of our Kenyans are failing because they are not good timers.
目標意識	我慢強さ	I summed them up and I said, you know, I think I have something to prove and I wanna prove it and I don't know how in that I have to, I'm very, very happy because I knew this is the only chance that I'm gonna make a difference. One thing I told mom is that I'm gonna go to Japan, I don't know when I'm gonna come back but I'm gonna come back. That is what I told my mom, yeah. You have to sit there and even the guys who have brought you into this country they will tell you, quit then go home. Because there is no point. (Homesick or not)
	目標	My goal, yeah, I want to win medals Once you are perfect, you are able to focus on a certain goal, a certain challenge in a certain way. I think I was happy, I think I didn't worry about living, I was more impressed about success, I was more passionate about success I really looked forward to spend it and I told them that, I'm gonna be a champion, I'm gonna go to the Olympics. I had a lot of burden waking me up at the age of 19 because you have said, I'm gonna go to Japan, yes, I wanna represent this country, yes, I'm gonna win a medal for my country. (Do you feel that is because you had a common goal, to run faster and to run better? To run in the marathon, do you feel that made you be more together?) Yes (So you think the reason you were successful is because you had a clear goal, you knew exactly what it is that you wanted to accomplish, the coach in Sendai said you have the ability to go to the Olympics, so that was your motivation, and that was what drove you to stay in Japan and to stay successful?) Yes
	目標 自分を信じる	Yes, and my coach in secondary school told me I can do much and even go to Olympics. So I had that in my mind. He said I can do this, so I had this in myself.
	目標達成	normality does not make you succeed. You must be abnormal, you must break the normal cycle of life, having no friends and going to parties, enjoying things, you have to break that normality and become abnormal.

表 10. ケニア人ランナーが活躍するために必要な要素③

自己効力感	タイムマネジメント	when I was in Kenya I had very good time management. If you come to me and tell me, Douglas, I'm a runner, I want to go to 2020, so, 2020 is four years away so what have you now? Do you have the qualities that makes a good runner, how is your training, how is your life, you know if you find any discrepancies within his or her life then you have to now start coaching her to the discrepancies bring them to the timing because its off time. Yes, so, that's what a coach does. You get somebody who is totally out of time and you bring that person to time. we might not be good runners. We might not all be good scholars, we might not be all good workers but there is something in common and I bet we all keep time. We are on top of things. That's one thing, I really feel very strongly that anybody who must succeed must be on time.
	自分で頑張る	(Would having your family with you make you more comfortable?) No, I don't think so, because you can not make yourself comfortable with your work with your family. Because it is your future. Because bringing my family to work and to my running, maybe I could do more bad.
	自分を理解	You know, you have to understand yourself, what is so good that you have that has made you come here?
	自分を信じる	(So they allowed you to believe in yourself?) Yes
	成功する	I think, yeah, I think that the most important thing for you to be successful in Japan is time. Doing whatever it takes to make that happen, they really do work hard to that. If you are going to be, like for example what I said, it's just crisscrossed. Already we have so many Kenyans in Japan and I will see them succeed. We need to bring now more Japanese to Kenya to see if they are gonna succeed. On the other way round, it's the other way round.
	チャンスに感謝	My impression was about getting an opportunity to go and run that was really, really great for me.
	プラス思考	That's why, I was telling you that, sometimes running is not about the knowledge or the genes or what, it is about the practicality of – as the negativity in life that you want to make it positive.
	向上心	練習熱心
チャレンジ精神		All that has been broken and you are saying I'm going to set a new – do something new, something special and that's why I have to break all these lights.

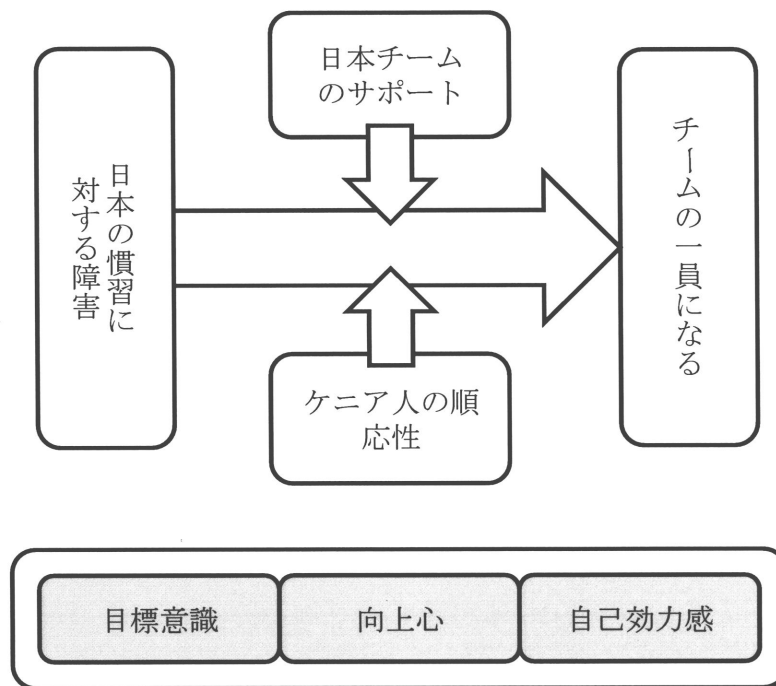


図8. ケニア人ランナーが日本で活躍するために必要な要素

## 第2節 ケニア人ランナーが最終的に成功するためのプロセス

図9はケニア人ランナーがオリンピック大会出場という成功に至るまでのプロセスを表した結果図である。そのプロセスの順番は下記の通りとなる。

最初に、日本チームが駅伝チームのパフォーマンスを上げるためにコーディネーターKにケニア人ランナーの紹介を依頼する。

2番目に、コーディネーターKは独自の考えで選んだ1)Kikuyu族、2)真面目、3)明るい、4)競技能力の高い、5)練習熱心。5つの要素を兼ね揃えたケニア人ランナーを日本チームに紹介する。

3番目に、ケニア人ランナーは所属した日本チームで、チームの一員になり、日本チームのサポートを受け、高い目標を持つことによりパフォーマンスを出すことができるのである。

最後に、ケニア人ランナーは日本でパフォーマンスを向上することにより、オリンピックにケニア代表として出場する成功を収めることができるのである。

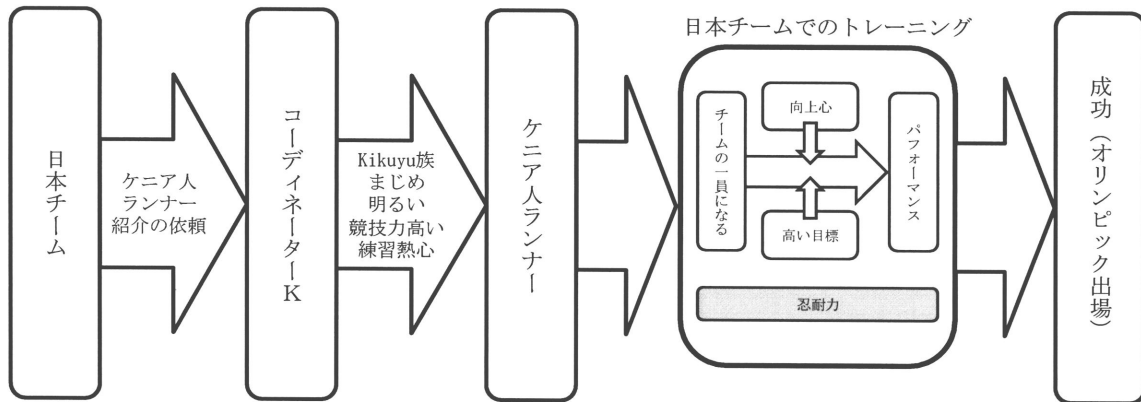


図9. ケニア人ランナーが日本で活躍し、成功するプロセス

### 第3節 成功したケニア人ランナーの共通点

本研究で定義したケニア人ランナーにとっての成功とは、ケニア代表でオリンピック大会に出場することである。日本で5年以上日本チームに所属した経験のあるケニア人ランナーで成功した選手は2008年の北京オリンピック大会までは6名しかいない。

成功したケニア人ランナー6名の共通点は、6人全員がKikuyu族に属することであった。さらに、6人全員が駅伝競技にも参加しており、日本チームの一員として日本人選手と一緒にトレーニングなどをしていたことである。ケニア人ランナーが日本に長期滞在できたのは、日本チームがケニア人ランナーを日本人ランナーと同じように平等に扱っていたからである。

### 第4節 コーディネーターKの役割

本研究では、ケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件として、コーディネーターKの役割を、インタビュー調査の結果により、考察を述べていく。

コーディネーターKが1984年に、初めてケニア人ランナーを日本チームに紹介して以来、2016年までに60人以上のケニア人ランナーが日本チームで活躍した。その内、6人はケニア代表選手としてオリンピック大会に参加している。1984年から2008年までの間に他にもケニア人ランナーは日本の企業、大学、高校などから直接スカウトされ、日本チームに所属しているが、誰一人としてオリンピック大会に参加していない。

オリンピック大会にケニア代表で参加した6人の選手のうち、3人はオリンピックメダリストとなった。さらに、その3人ともオリンピック大会のマラソン競技でメダルを獲得している。2008年までケニアがオリンピック大会のマラソン競技でメダルを獲得した選手たちは全員日本チームに5年以上所属した選手である。

コーディネーターKが紹介した選手が、日本チームで活躍することができた理由はい



くつか考えられる。

一つ目は、コーディネーターKがケニアで選手を選抜する際に、日本の文化や、駅伝競技に合った選手を事前に選んでいる点である。日本チームで活躍するためには、競技能力は当然必要ではあるが、それ以上にチームの一員として日々の生活を過ごせるか、チームの一員として日本人と練習やトレーニングができるかが重要となる。それによって、ケニア人ランナーは長期間、日本でランナーとしての競技能力を高め、最終的にオリンピックに出場するまでに至っている。

二つ目は、ケニア人ランナー本人の金銭的欲求の高さが関係していると考えられる。ケニア人ランナーの多くは、貧困を抜け出すためにランナーになることが多い<sup>25)34)49)</sup>。World Marathon Majorsで初めて賞金が出たのは、1986年のボストンマラソンである<sup>6)</sup>。その後、多くのケニア人ランナーが世界中のマラソン大会で優勝している<sup>51)</sup>。さらに、2000年からはヨーロッパなどでもレースが増え、貧困から抜け出す方法として、多くのケニア人ランナーがヨーロッパの賞金レースに出るようになってきている<sup>25)</sup>。

しかし、コーディネーターKが日本チームに紹介したケニア人ランナーは、これらの賞金レースで一攫千金を狙う選手とは少し異なっていた。日本チームにとっては駅伝が主となり、賞金獲得を目的とするのではなく、安定した給料をもらいながらチームのランナーとして走っているためという事実である<sup>25)</sup>。

日本の平均年収が37,304米ドルであった2015年当時に、ケニアの平均年収は1,521米ドルであり、ケニアの平均年収は日本の平均年収の25分の1しかなかった<sup>22)</sup>。このように、日本で平均的な年収を稼ぎながら、日本チームで駅伝競技に出ることはケニア人ランナーにとって大きな収入を得る方法となっていたと考えられる。忍耐力のあるケニア人ランナーは、長期的に日本のチームに所属し、安定した給料をもらいながら、日本チームの一員として頑張ることができたと考えられる。

最後に、コーディネーターKが、ケニア人ランナーに必ず伝達した内容がある。それは、「マラソンは年間2回までが限度で、その1回は自分の収入のために賞金レースに参加して、もう1回は国のためにオリンピック大会などの賞金が出ないレースに出場すること」であった。日本チームに所属しているケニア人ランナーにとっては、賞金のないオリンピック大会に出場しても、安定した給料をもらいながら走れるのに加えて、オリンピック大会で好成績をあげると、ボーナスなども獲得できるので、結果的に賞金レースと同様の結果を得られるのであった。

#### 第5節 ケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件

本研究では、ケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件として、コーディネ

ーターKの存在が必要不可欠であったが、さらに日本でトレーニングをしてオリンピック大会に出場したケニア人ランナーは全員 Kikuyu 族の選手であった。

Kikuyu 族は農耕民族で、Kalenjin 族が放牧民族である。この2つの民族の特性の違いが日本の文化の中で、我慢強く、一つの場所に止まり頑張れるかの違いである。

農耕民族である Kikuyu 族は長期的に物事を考えることができ、起業家としてのセンスもあるため、安定した給料を得られる職につく傾向にあった<sup>13)37)45)</sup>。一方、遊牧民族である Kalenjin 族は目の前の状況で物事を判断するため、安定的な収入より一攫千金を狙う傾向にあった。よって、安定的な給料をもらいながら、長期間一つの場所で頑張る必要のある日本チームには農耕民族の Kikuyu 族のほうが向いていたのである。

日本チームは、駅伝で成功するためにケニア人ランナーをチームの一員として受け入れているので、長期的に駅伝チームで頑張れる選手を求めている。さらに、駅伝はたすきを、次の走者につなげる必要があるので、我慢強く頑張れる選手を求めている。調子や、タイムが少し悪いことで簡単に諦めてしまう選手に駅伝を任せることができないという慣習が存在するからである。したがって、我慢強く、責任感があり、一つの場所で頑張れる農耕民族である Kikuyu 族の選手が日本チームにとって頼れる選手となる。

日本チームで安定的な給料をもらいながら、駅伝競技に参加して競技能力を高めた農耕民族の Kikuyu 族の選手は、賞金が出ないオリンピック大会のマラソン競技であっても、十分メリットを感じる事ができたと考えられる。一方、放牧民族の Kalenjin 族の選手にとって、賞金が出ないオリンピック大会のマラソン競技は、走るのが大変なだけであった<sup>25)</sup>。

放牧民族の Kalenjin 族の選手は、World Marathon Majors で好成績を残している割に、同ランナーがオリンピック大会には参加していないことからケニア人ランナーが日本で活躍するための必要条件として、ケニア人ランナーの中で競技能力が最も高い Kalenjin 族より、Kikuyu 族の方が日本チームでより活躍できているのはなぜなのかに関して、農耕民族である Kikuyu 族の方が日本の文化に適応しており、駅伝チームでトレーニングをしながらケニア代表でオリンピック大会に参加することができたのであると考えられる。

## 第6節 2008年以降のオリンピック大会マラソン競技で成功しているランナーの特性

本研究における対象の期間は、1984年から2008年の24年間であった。2008年までは、コーディネーターKが日本チームに紹介した Kikuyu 族の選手のみが、オリンピック大会のマラソン競技でメダリストになっていたが、2008年以降のメダリストはそれまでとは、全く異なるランナーがメダリストになっている。表11は2012年のロン

ドンオリンピック大会と、2016年のリオデジャネイロオリンピック大会の男子マラソンメダリストの国籍と部族を表したものである。

2008年の北京オリンピック大会以降、世界のマラソン大会では高額ギャランティー(appearance fee)がオリンピックメダリストに支払われるようになった。そこで、オリンピック大会で好成績を上げることが結果的に高額賞金マラソン大会への招待に繋がるようになった<sup>17)</sup>。それ以降、多くのケニア人ランナーがオリンピック大会に出場するメリットを感じるようになり、2012年と2016年のオリンピック大会男子マラソン競技のメダリストはそれまでとは全く違う属性のランナーがメダリストになっている。

2012年のロンドンオリンピック大会で、男子マラソンで1位になったのはウガンダ人であるが、元々はケニア国籍のKalenjin族の選手であった。さらに、2位と3位の選手もKalenjin族の選手であった。さらに、2016年のリオデジャネイロオリンピック大会の1位になった選手もKalenjin族の選手であった。すなわち、2012年と2016年のオリンピック大会ではメダリストの6人中4人がKalenjin族であった。

2008年以降は、ケニア人ランナーにとってオリンピック大会に出場するメリットや選手として収入を得る方法が大きく変化したために、コーディネーターKの役割や、日本で活躍できる選手の必要条件は大きく変わっている可能性がある。

表 11. 2012年と2016年オリンピック大会男子マラソンメダリスト

オリンピック大会	金メダル	銀メダル	銅メダル
ロンドン(2012)	Stephen Kiprotich	Abel Kirui	Wilson Kipsang Kiprotich
国籍	ウガンダ	ケニア	ケニア
部族	Kalenjin	Kalenjin	Kalenjin
リオデジャネイロ(2016)	Eliud Kipchoge (KEN)	Feyisa Lelisa (ETH)	Galen Rupp (USA)
国籍	ケニア	エチオピア	米国
部族	Kalenjin	-	-

各大会の結果のデータは(International Olympic Committee)<sup>50)</sup>より参照

#### 第7節 2008年以降における日本で活躍しているケニア人ランナーの特性

図10は2016年の実業団ニューイヤー駅伝チームに所属していた外国人選手の割合を表したものである。

2016年の時点で、実業団のニューイヤー駅伝で走っている選手はKikuyu族の選手、Kalenjin族の選手とエチオピア人の選手がいる。Kalenjin族の選手の人数が増えているのは、日本チームが独自にケニアに行ってケニア人ランナーをスカウトしているから

である。コーディネーターKが関係している選手は、25人中3人しかいない。

実業団のチームはケニア人ランナーと年間契約を結び、長期的に頑張れる選手を求め  
るのではなく、短期的にチームのパフォーマンスを上げられる選手を求めているので、  
Kalenjin 族の選手が日本にも増えたと考えられる。

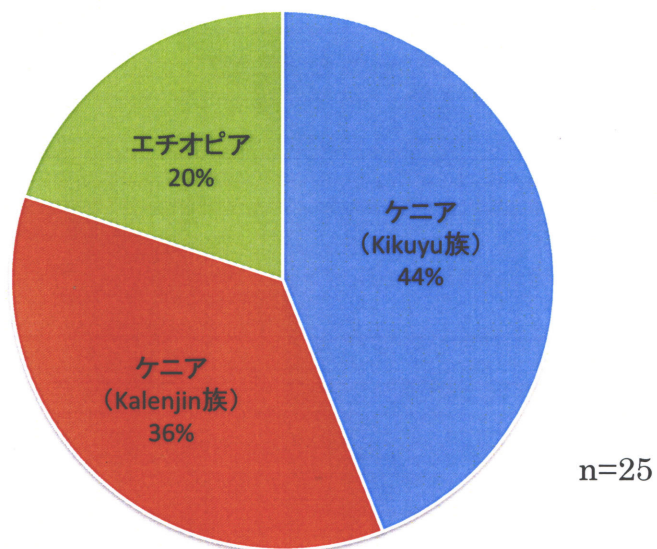


図 10. 2016 年ニューイヤー駅伝に出場した外国人選手  
TBS ホームページ<sup>53)</sup>より編集

## 第5章 結論

### 第1節 本研究における結論

本研究の目的は 1984 年から 2008 年までの 24 年間、ケニア人ランナーが日本チームに所属する導入期において、ケニア人ランナーが活躍するための必要条件を明確にすることであった。

研究方法は、コーディネーターK、日本でトレーニングをしてオリンピック大会に出場したケニア人ランナー、日本チームの監督を対象に、半構造化インタビューを行い、インタビューの結果を M-GTA を用いて結果図を作成した。

本研究の結果から、ケニア人ランナーが日本チームに所属する導入期において、ケニア人ランナーが日本で活躍するためには、コーディネーターK の存在が必要不可欠であったと考えられる。さらに、コーディネーターK が選んだケニア人ランナーでオリンピック代表選手に選ばれたランナーは全員 Kikuyu 族であった。その背景には Kikuyu 族ならでの性格や考え方という特徴があったために、日本で活躍できたと考えられる。

一方、2008 年以降はケニア人ランナーが日本へ来日する手段が複数存在し、コーディネーターK の仲介がなくても日本チームに所属する方法は他にも存在するが、2016 年現在においてもコーディネーターK の実績を信頼し、依頼する日本チームは未だに存在する。

### 第2節 研究の限界

#### 第1項 ケニア人ランナー

本研究は、日本チームに5年以上所属し、ケニア代表でオリンピック大会に出場した経験のあるケニア人ランナーを対象に調査した。しかしながら、6人中1人はすでに他界しており、3人は連絡をとることができなかった。よって、6人中2人にしかインタビュー調査をすることができなかった。

#### 第2項 日本チームの監督

本研究は、成功したケニア人ランナーが所属した日本チームの監督を研究の対象にした。しかし、オリンピック大会の男子マラソンでメダルを獲得した3選手の指導者で話を聞いたのは3人中1人であった。1人は他界しており、もう1人は連絡をとることができなかった。したがって、本研究の調査機関である、1984年から2008年の間に活躍し、成功したケニア人ランナーを指導した監督は結果的に1人であった。

### 第3節 今後の研究課題

最初に、本研究において陸上競技の中でも長距離走に着目していたが、それ以外の競技で海外の選手を受け入れることによって、どのような影響があり、どのような選手が日本で競技能力を高めることができるのかを明確にすることによって、本研究の結果と比べることができる。

次に、本研究において日本の文化やチームに着目していたのが、他国の現状がどのようなかを調査することによって、本研究の結果と比べることができる。よって、日本と他国の違いを検証することができる。

最後に、本研究において、日本に来たケニア人ランナーに着目していたが、他国に行った日本人の調査をすることによって、日本人が海外の文化で成功するための必要条件などを調査することができる。

引用・参考文献

- 1) Albrecht, A. G., Dilchert, S., Deller, J., & Paulus, F. M. (2014). Openness in cross-cultural work settings: a multicountry study of expatriates. *Journal of personality assessment*, 96(1), 64-75.
- 2) Archontology.org. (2013, July 12). Kenya: Heads of State: 1964-2016. Retrieved November 23, 2016, from [http://www.archontology.org/nations/kenya/00\\_1964\\_td\\_s.php](http://www.archontology.org/nations/kenya/00_1964_td_s.php)
- 3) Bale, J., & Sang, J. (1996). *Kenyan running: Movement culture, geography, and global change*. Psychology Press.
- 4) Berlin Marathon. (n.d.). Results Archive. Retrieved November 18, 2016, from <http://www.bmw-berlin-marathon.com/en/facts-and-figures/results-archive.html>
- 5) Boston Athletic Association. (n.d.). Mens Open Division. Retrieved November 18, 2016, from <http://www.baa.org/races/boston-marathon/boston-marathon-history/champions/mens-open-division.aspx>
- 6) Boston Athletic Association. (n.d.). Prize Money and Age Group Awards. Retrieved November 12, 2016, from <http://www.baa.org/races/boston-marathon/event-information/prize-money-and-awards.aspx>
- 7) Carrick, B. (2011, December 24). Ekiden: A closer look at the Japanese way. Retrieved November 16, 2016, from [http://www.espn.com/blog/high-school/track-and-xc/post/\\_id/731/ekiden-a-closer-look-at-the-japanese-way](http://www.espn.com/blog/high-school/track-and-xc/post/_id/731/ekiden-a-closer-look-at-the-japanese-way)
- 8) Central Intelligence Agency. (n.d.). The World Factbook: KENYA. Retrieved November 14, 2016, from <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/ke.html>
- 9) Chicago Marathon. (n.d.). Bank of America Chicago Marathon. Retrieved November 18, 2016, from <http://chicago-history.r.mikatiming.de/2015/>
- 10) Chicago Marathon. (n.d.). Bank of America Chicago Marathon. Retrieved November 18, 2016, from <http://results.chicagomarathon.com/2016/?pid=list>
- 11) Collier, P. (2005). *Understanding Civil War: Africa (Vol. 1)*. World Bank Publications.

- 12) Ensor, J., & Berger, R. (2009). Community-based adaptation and culture in theory and practice (pp. 227-239). Cambridge University Press, New York.
- 13) Fiona, A., & Mackenzie, D. (2000). Contested ground: Colonial narratives and the Kenyan environment, 1920–1945. *Journal of Southern African Studies*, 26(4), 697-718.
- 14) gaimusyo 外務省. (2016, August 22). ケニア共和国 (Republic of Kenya) 基礎データ. Retrieved November 10, 2016, from <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html#section1>
- 15) Glad Cube Inc. (2016, November 26). 箱根駅伝の外国人選手の歴史やルールはどうなっているの? | SPAIA. Retrieved December 4, 2016, from <http://spaia.jp/column/athletics/1703>
- 16) Hunt, C. M., Spence, M., & McBride, A. (2016). The role of boundary spanners in delivering collaborative care: a process evaluation. *BMC Family Practice*, 17(1), 96.
- 17) Hutchinson, A. (2013, October 3). Appearance fees and the explosion of marathon times. Retrieved November 30, 2016, from <http://www.runnersworld.com/sweat-science/appearance-fees-and-the-explosion-of-marathon-times>
- 18) International Association of Athletics Federations. (n.d.). Olympic Games Records. Retrieved October 18, 2016, from <https://www.iaaf.org/records/by-category/olympic-games-records>
- 19) International Association of Athletics Federations. Marathon - men - senior - outdoor - 2016 | iaaf.org. (n.d.). Retrieved October 18, 2016, from <https://www.iaaf.org/records/toplists/road-running/marathon/outdoor/men/senior/2016>
- 20) International Association of Athletics Federations. Marathon - men - senior - outdoor | iaaf.org. (n.d.). Retrieved October 18, 2016, from <https://www.iaaf.org/records/toplists/roadrunning/marathon/outdoor/men/senior>
- 21) International Association of Athletics Federations. World Records | iaaf.org. (n.d.). Retrieved October 18, 2016, from <https://www.iaaf.org/records/by-category/world-records>
- 22) International Monetary Fund. (n.d.). Data. Retrieved November 08, 2016,



- from  
[http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2016/02/weodata/weorept.aspx?pr.x=59&pr.y=8&sy=2014&ey=2016&scsm=1&ssd=1&sort=country&ds=.&br=1&c=158,664&s=NGDP\\_RPCH,NGDPD,NGDPDPC,LUR,LE,LP&grp=0&a=](http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2016/02/weodata/weorept.aspx?pr.x=59&pr.y=8&sy=2014&ey=2016&scsm=1&ssd=1&sort=country&ds=.&br=1&c=158,664&s=NGDP_RPCH,NGDPD,NGDPDPC,LUR,LE,LP&grp=0&a=)
- 23) Japan Association of Athletics Federations. (2016, October 14). 日本記録. Retrieved October 18, 2016, from <http://www.jaaf.or.jp/record/japan.html>
  - 24) Kanyiba, L. R., Mwisukha, A., & Onywera, V. O. (2015). The gap between the management and success of elite middle and long distance runners in Kenya. *African Journal for Physical, Health Education, Recreation and Dance*, 21(2), 586-595.
  - 25) Kato 加藤, 康. (2013, February 20). ケニア人選手はなぜ日本を目指すのか?. Retrieved November 23, 2016, from [https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/othersports/rikujo/2013/02/20/post\\_199/index\\_3.php](https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/othersports/rikujo/2013/02/20/post_199/index_3.php)
  - 26) Kealey, D. J., & Ruben, B. D. (1983). Cross-cultural personnel selection criteria, issues, and methods. *Handbook of intercultural training*, 1, 155-175.
  - 27) Kenya Medalists. (n.d.). Retrieved November 8, 2016, from <http://www.kenyapage.net/athletics/mens-records.html>
  - 28) Kenya Medalists. (n.d.). Retrieved November 8, 2016, from <http://www.kenyapage.net/athletics/olympics.html>
  - 29) Kenyan Embassy. (n.d.). ABOUT KENYA - kenya-brussels.com. Retrieved November 16, 2016, from <http://www.kenya-brussels.com/index.php?menu=2&leftmenu=43&page=53>
  - 30) Kinoshita, Y. (2007). *Modified grounded theory approach*. Tokyo: Kobundo (in Japanese).
  - 31) Larsen, H. B. (2003). Kenyan dominance in distance running. *Comparative Biochemistry and Physiology Part A: Molecular & Integrative Physiology*, 136(1), 161-170.
  - 32) Larsen, H. B., Christensen, D. L., Nolan, T., & Søndergaard, H. (2004). Body dimensions, exercise capacity and physical activity level of adolescent Nandi boys in western Kenya. *Annals of human biology*, 31(2), 159-173.
  - 33) London Marathon. (n.d.). News & Media. Retrieved November 18, 2016, from <https://www.virginmoneylondonmarathon.com/en-gb/news-media/media-resou>

rces/race-reports/

- 34) Manners, J. (1997). Kenya's running tribe. *Sports Historian*, 17(2), 14-27.
- 35) Mooses, M., Mooses, K., Haile, D. W., Durussel, J., Kaasik, P., & Pitsiladis, Y. P. (2015). Dissociation between running economy and running performance in elite Kenyan distance runners. *Journal of sports sciences*, 33(2), 136-144.
- 36) Morgan, D. W., Baldini, F. D., Martin, P. E., & Kohrt, W. M. (1989). Ten kilometer performance and predicted velocity at VO<sub>2</sub>max among well-trained male runners. *Medicine and Science in Sports and Exercise*, 21(1), 78-83.
- 37) Mungai, E. N., & Ogot, M. (2012). Gender, culture and entrepreneurship in Kenya. *International Business Research*, 5(5), 175.
- 38) New York City Marathon. (2015). New York City Marathon Results. Retrieved November 18, 2016, from <http://adventure-marathon.com/new-york-city-marathon-results>
- 39) New York City Marathon. (n.d.). Results Archive. Retrieved November 18, 2016, from [http://web2.nyrrc.org/cgi-bin/start.cgi/mar-programs/archive/archive\\_search.html](http://web2.nyrrc.org/cgi-bin/start.cgi/mar-programs/archive/archive_search.html)
- 40) nihon sumo 日本相撲協会公式. (n.d.). Retrieved December 4, 2016, from <http://www.sumo.or.jp/ResultRikishiData/search>
- 41) nikkansupo 日刊スポーツ. (2016, January 2). 日大5区キトニー歴代2位の区間賞「楽しかった」 - 陸上. Retrieved December 04, 2016, from <http://www.nikkansports.com/sports/athletics/news/1586963.html>
- 42) nikkansupo 日刊スポーツ. (2016, May 16). Jリーグ開幕、横浜マリノス歴史的1勝／復刻 - J1. Retrieved December 04, 2016, from <http://www.nikkansports.com/soccer/news/1645144.html>
- 43) nikkansupo 日刊スポーツ. (2016, September 7). J逆戻り来季から1ステージ制、外国人枠も拡大へ - J1. Retrieved December 04, 2016, from <http://www.nikkansports.com/soccer/news/1706160.html>
- 44) Onywera, V. O., Scott, R. A., Boit, M. K., & Pitsiladis, Y. P. (2006). Demographic characteristics of elite Kenyan endurance runners. *Journal of sports sciences*, 24(4), 415-422.
- 45) Parsons, T. (2012). Being Kikuyu in Meru: Challenging the tribal geography of colonial Kenya. *The Journal of African History*, 53(01), 65-86.

- 46) Peltokorpi, V., & Froese, F. J. (2012). The impact of expatriate personality traits on cross-cultural adjustment: A study with expatriates in Japan. *International Business Review*, 21(4), 734-746.
- 47) saito 斉藤健仁. (2015, October 01). 【ラグビーW杯】日本代表を彩る「外国出身選手」の異色な経歴 | ラグビー | 集英社のスポーツ総合雑誌 スポルティーバ 公式サイト web Sportiva. Retrieved December 04, 2016, from [https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/rugby/2015/10/01/post\\_478/](https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/rugby/2015/10/01/post_478/)
- 48) Saltin, B., Larsen, H., Terrados, N., Bangsbo, J., Bak, T., Kim, C. K., ... & Rolf, C. J. (1995). Aerobic exercise capacity at sea level and at altitude in Kenyan boys, junior and senior runners compared with Scandinavian runners. *Scandinavian journal of medicine & science in sports*, 5(4), 209-221.
- 49) Scott, R. A., & Pitsiladis, Y. P. (2006). Genetics and the success of East African distance runners. *International SportMed Journal*, 7(3).
- 50) shibahara 柴原拓哉, 大場友裕, 石原達朗, 田中剛貴, & 大平充宣. (2015). 最大酸素消費量レベルは持久性運動パフォーマンスにどれだけ貢献するのか?. *同志社スポーツ健康科学*, 7, 52-66.
- 51) Simiyu Njororai, W. W. (2012). Distance running in Kenya: athletics labour migration and its consequences. *Leisure/Loisir*, 36(2), 187-209.
- 52) Stevens, R. (2015, September 19). Rugby World Cup 2015: South Africa 32-34 Japan. Retrieved December 01, 2016, from <http://www.bbc.com/sport/rugby-union/34269878>
- 53) TBS. (n.d.). ニューイヤー駅伝 2016. Retrieved November 12, 2016, from <http://www.tbs.co.jp/newyearekiden/2016/live/>
- 54) The International Olympic Committee. (n.d.). Kenya. Retrieved October 18, 2016, from <https://www.olympic.org/kenya>
- 55) The International Olympic Committee. (n.d.). Marathon Men. Retrieved November 12, 2016, from <https://www.olympic.org/athletics/marathon-men>
- 56) Tokyo Marathon Foundation. (n.d.). 東京マラソン 2017. Retrieved November 18, 2016, from <http://www.marathon.tokyo/about/past/>
- 57) Tucker, R., Onywera, V. O., & Santos-Concejero, J. (2015). Analysis of the Kenyan distance-running phenomenon. *Int J Sports Physiol Perform*, 10, 285-291.
- 58) Wilber, R. L., & Pitsiladis, Y. P. (2012). Kenyan and Ethiopian distance

- runners: what makes them so good. *Int J Sports Physiol Perform*, 7(2), 92-102.
- 59) Williams, P. (2002). The competent boundary spanner. *Public administration*, 80(1), 103-124.
- 60) World and World Student Cross Country Championships. (n.d.). Retrieved October 18, 2016, from <http://www.gbrathletics.com/ic/xc.htm>
- 61) yamada 山田満. (2007). 2007 年箱根駅伝総合優勝の広報効果の研究. *順天堂大学スポーツ健康科学研究*, (11), 95-102.
- 62) yamanaka 山中亮, 松林武生, 佐伯徹郎, 榎本靖士, 山崎一彦, & 杉田正明. (2016). 高校トップレベル男子長距離走者のパフォーマンスと大腰筋の筋横断面積および最高酸素摂取量の関係. *体力科学*, 65(3), 307-313.

# **Conditions Required for Kenyan Runners to be Successful in Japan**

So Sugiyama

Juntendo University

## **Abstract**

### **Background**

Many sports in Japan have become more global in recent years. Japan's national rugby team participated in the 2015 Rugby World Cup with many foreign players. Sumo wrestling also has three Yokozunas who are all from Mongolia. The success of foreign athletes has become more and more common.

Athletics has also seen a similar trend. During the 2016 New Year Ekiden, 25 out of 43 teams had a foreign runner participate. Also for the 2016 Hakone Ekiden, a Kenyan runner came in first for the 5<sup>th</sup> section of the Ekiden. The existence of foreign runners can be attributed to the increased performance of athletics in Japan, and most of the foreign runners come from Kenya. However, there is no research that explains why there are so many Kenyan runners in Japan, and how they became so successful.

### **Purpose**

The purpose of this study was to clarify the conditions required for Kenyan runners to be successful in Japan by being part of a Japanese team for over 5 years, and participating in the Olympics for Kenya, during the 24-year period of 1984 to 2008.

### **Method**

A semi-structured interview was conducted for 1) Sports coordinator, K 2) 6 Kenyan runners, 3) Head coach of Japanese Ekiden team. The data collected was analyzed using the M-GTA method, and the results were compiled into a figure.

### **Results and discussion**

For a Kenyan runner to be successful in Japan, and to participate in the Olympics for Kenya, the existence of coordinator K was crucial. Coordinator K would preselect Kenyan runners who could adjust to the Japanese culture, and that was what allowed the Kenyan runners to be successful in Japan.

Also the Kenyan runners who belonged to the Kikuyu tribe were especially successful in Japan due to their unique cultural background that suited the Japanese culture and allowed them to become part of the Japanese Ekiden team.

### **Conclusion**

For Kenyan runners to be successful in Japan between 1984 and 2008, 3 conditions were required, 1) The existence of coordinator K, 2) The Kenyan runner to belong to the Kikuyu tribe, 3) The ability of the Kenyan runner to adjust to the Japanese team.

## 謝辭

I would like to express my sincere appreciation to Dr. Etsuko Ogasawara for her constant guidance and encouragement throughout my journey to complete this thesis. Without Dr. Ogasawara's countless hours of dedication and support this would have not been possible. I am also grateful for Dr. Maki Ito's support toward the successful completion of my studies.

I would also like to thank my committee members, Dr. Yasuhiro Kudo, and Dr. Natsue Koikawa for their warm support in guiding me through the final steps of completing the thesis. I am grateful for how they both found time in their busy schedule to meet up with me.

I am grateful to Dr. Akira Nakamura, and Dr. Tadashi Watari together with Dr. Yasuhiro Kudo, for their time in verifying my results.

I am thankful to all the professors at Juntendo University for their support and advice when completing the thesis. Their ideas assisted me in improving my work.

I would like to express my gratitude toward the staff members of JCRWS for always making me feel at home while I worked on my thesis. I also would not have enjoyed my time if it weren't for my classmates. Thank you guys.

I am also extremely thankful to my parents for all their support while I completed the thesis. Without their support and understanding, I could not have spent so many hours to complete the thesis.

Finally I would like to thank my wife Ai for all her support. I never would have even joined Juntendo University Graduate School if it weren't for her. Ai's support throughout every step of the way to complete the thesis was truly a precious time, which I will treasure forever.